
魔界戦記

drftgyhujikolp00

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界戦記

【Nコード】

N5492I

【作者名】

drftgyhujikolpoo

【あらすじ】

黒法師家跡継ぎの黒衣優は、自らの一族を何者かに殺され、路頭に迷っていた。そこで自分と同じような境遇の敵対関係にある六道家の少女葉竹亜弥子と出会う。

第一話「始まり」

冷たい風が吹きつける。まだ十一月なのに、本格的な冬が訪れてきたらしい。結局今日も何もなく無駄な一日を過ごしてしまったようだ。悴む指を息で暖めつつ、急いで家路につく。この坂道を登りきったら僕の家だ。家といっても毛布とダンボールでできた質素なものでこれが住居といえるかどうか、自分でも不思議に思っていた。

一ヶ月前までは、僕は黒法師家という魔界でも七王家に匹敵するほどの有力な一族の跡継ぎとして、育てられた。父親は物心ついた頃から僕に処世術のようなものばかり教えていた。母親は僕が産まれてすぐに病死して、姉だけが僕を可愛がってくれた。その時は、毎日食事にありつけた。今思うと幸せだったのかもしれない。しかし一ヶ月前のある日、事は起こった。黒法師家が親戚も含め皆殺しにあつた。僕は辛うじて逃げ出したが、他の家族とは離別してしまい、路頭に迷っていた。誰が犯人かは皆目見当もつかない。父親が黒法師家とは二千年来の敵対関係にある一族がある、という話をしていたことを覚えている。何にしろ、犯人は非常に恐ろしかった。死人のような目で、反抗した僕の家族や親戚を数分の内に屠ってしまった。僕は犯人の強さと残忍さに戦慄した。

そんな回想をしているうちに、坂道を登りきった。僕の家が見えた。いつも通りのマイホーム。ある点を除いては。

僕の家で僕と同じくらいの年の少女が眠っていた。近所の住人だろうか。それにしても、様子がおかしい。恐る恐る声をかけてみた。

「あ、あのー…」

彼女は眠ったまま起きようとはしない。そうとう熟睡しているようだから起こすのをやめようと思った瞬間、

「ぐ、ごめんなさい！」

彼女は目を覚ましたようで勝手に寝ているのがばれて慌てている。

「こんな所で寝ていると風邪ひきますよ。」

少し話題をそらしてみた。彼女は少し安心した様子だ。

「どうしたんですか？」

僕は尋ねてみる。彼女はしばらく口を閉ざしていたがやっと話し出した。

「実は私、家族が死んでとりあえず上京したんですがホームレス生活を送るしかなかったんです。」

話を聞いていくうちに、彼女が闇の都ではなく魔国六道領から来た事、姉と生き別れになったこと、そして家族が皆殺しにされたことなどを話してくれた。「家族が皆殺し」という彼女の言葉を聞いて、少し驚いたが突然の事で彼女に何も言葉をかけられなかった。しばらく二人の間に沈黙が流れた。もう一度話題をそらすことにしよう。

「あなたは、今晚どこで寝るんですか？」

「今晚寝るところですか。実は……」

すこし彼女は言いくそうにしていたので、

「どうしたんですか？」

「実は今晚寝る場所がなかったから、あなたの毛布とダンボールを勝手に使ったんです。」

「そうですか。よかったら、僕はあっちのベンチで寝ますんで、ここ使ってください。」

「ありがとうございます。」

「ところで、お名前は？」

「葉竹亜弥子です。あなたのお名前は？」

「黒衣優です。」

ちなみに、黒法師家というのは、初代当主の通称が黒法師だったという二千年も前の逸話からきていて、本当の苗字は黒衣なのである。

「え、黒衣？」

彼女は何かを言いたそうだったが、それ以上は何も言わなかった。

翌朝、目を覚ますと既に彼女は起きていた。

「昨晚はありがとうございました。なんとお礼をいつたらいいか。」

「こちらこそどうも。それより、今晚の寢床なんですけど僕の使い古しでもいいんなら…」

言い終わらないうちに彼女は、

「そんなことしなくても結構です。」

と軽くお辞儀をして走り去ろうとした。その刹那、彼女の首にかけている宝石がついた首飾りが目に飛び込んだ。

「きれいな首飾りですね。」

彼女は立ち止まった。

「実はこれ、二千年前から我が家に伝わる魔鉱石とよばれる宝石なんです。」

「二千年前か、…」

「あなたもしかして黒衣ってことは黒法師家に何か関係ありますか？」

これは予想外の質問だ。彼女に敵意はなさそうなので正直に答えよう。

「そうですけど。」

「実は私、六道家の人間なんです。」

六道家。以前父親が言っていた。黒法師家と敵対関係にある家柄。

彼女の清楚で優しいイメージとはとても似ても似つかない。僕と

彼女のカミングアウトにより話すことが増えた。そして、彼女とは

寢食を共にするようになった。（寢食といっても食事の機会なんて

ほとんどないのだが。）

第二話「御饌津の出会い」

亜弥子との生活もそろそろ一週間が経とうとした。彼女と出会ってから毎日が少し意味のあるように思えてきた。僕達が住んでいる所は、黒法師領の北端にある御饌津^{みけつ}山の北で闇の都の南端だ。御饌津というのは神様の名前だと聞いた事があるような気がする。この山は神聖な山らしいので、至る所に大小様々な神社がある。その中でも黒法師・六道両家の氏神である御饌津大社に何か自分達の一族を殺した犯人の手がかりをつかめるかもしれないと思って、二人で行ってみた。日中でも鬱蒼と茂る木々のせいで薄暗い。こんな所には絶対夜行きたくないと心の中で思いながら参道を進んで行った。黒法師領にある所為か、参拝客の姿は見えないはずだ。しかし、本殿へと続く無人の階段を上った先には一人の男が経っていた。

「こんな所で君達は何をしているんだい？」男は僕達に話しかけた。男は二十歳ぐらいで、どこか落ち着いたオーラが出ていた。しかし、黒法師領で見る人間ではない。

「あなたこそここで何をしていますか？黒法師領には、普通外部の人間が入ってくる事なんて無いのに。」

「今は普通の状況じゃないんだ。今、闇の国は水の国と一戦交えようとしている。だから、君達が必要なんだ。」

「なぜ僕達が必要なんですか？」

「隠そうとしても無駄。君は黒法師家の人間だろ。黒法師家の人間なら君くらいのも年でも、相当の魔法が使えるはずだ。そして、君は……」男は亜弥子にも話しかけた。

「私ですか？」亜弥子は少し驚いた様子だった。

「なぜか、六道家の人間である君が敵地である黒法師領にいる。君がここにいるということは、六道家に何かあったんだろう？」この男、意外と侮れない。敵意はなさそうなので、僕と亜弥子は今の黒法師家と六道家の状況について語った。

「なんで、君はここに留まっているんだ？ここはもはや安全では無い。ここにいくくらいなら一旦闇の都にこないか？」

「ここより闇の都の方が安全な訳……」

「ここを守護する黒法師家が君だけなら、もし君に何かあってもどうすることもできない。君達の素性は誰にも言わないから闇の都にこないか。もし闇の都へ来る気があるならここへ行けばいい。」男はそう言い残すと、次の瞬間消えていた。

しばらく、僕達はそこに立ちつくしていた。男の言ったことは、決して間違っではない。ここに残ってもいつ殺されるか分からない。躊躇う理由なんてなかったが、生まれてからずっと暮らしてきたこの土地を離れる決心はなかなかなかった。

「亜弥子は闇の都へ行った方がいいと思う？」

「私は、魔国六道領を出た。また戻ってくる気があるなら、いったん行った方がいいと思う。また戻れると思えばここを発つのは決して難しい選択じゃないと思うよ。」彼女は自信満々に言った。

「じゃあ、明日闇の都へ行こう。」こうして、僕と亜弥子は闇の都へ行くことになった。

次の日の早朝、闇の都へと旅立った。旅立つといっても大袈裟なもので、御饌津山を越えればすぐ闇の都には着く。しかし僕は初めて黒法師領外へ出るので期待度はかなり高かった。御饌津山はそう大きくないので、あっという間に山を越えてしまった。

「これが、闇の都か。。。」「僕は思わず建ち並ぶ高層ビルを見て息を呑んだ。

「ここはほんの一角に過ぎないらしいよ。」亜弥子は僕にそういった。闇の都についてからは、男が教えてくれた場所に行くのはなんの造作もなかった。そこは、闇の都でも群を抜いて巨大なビルだった。僕と亜弥子はドアをくぐった。

第三話「そして、闇魔術局へ」

ドアの向こうはどこにでもあるようなオフィスビルで、数え切れないほどの人間が右往左往していた。

「なんだよ、この空気中の魔力、」入ってすぐに、今まで感じたことがないほどの膨大な魔力を感じた。ふと、背後から、

「君達なら来てくれると思っていた。俺に着いてきて。」御饌津大社で出会った男が僕達に言った。

「ここは、どこなんだ？なんでこんなに膨大な魔力を感じるんだ？」男に聞きたい事はたくさんあったが、

「後から説明する。」と、一言だけ言って、そのまま歩き出した。エレベーターに乗っている途中、突然亜弥子が、

「ここは、もしかして闇の国の魔術局なの？」

「そうだ。だから、ここでは君達みたいな人間は膨大な魔力を感じる。」

「私達みたいなの？」

「僕がここに君達を呼んだのは、君達から異常なまでの魔力を感じたからだ。」

「あなたも、魔力感応術者なの？」

「俺の場合は、君達とは違って訓練してなったけど魔力感応術者であることは変わり無い。」

「で、闇の国の軍勢の魔術部隊の一員として、ヘッドハンティングってことか。」僕は、やっとこの男の意図に気付いた。

「お察しの通り。君達には協力してもらいたい。」

「なんで、関係の無い他国の軍勢に協力しなくちゃいけないんだ？」

「もちろん、任務に成功した際にはちゃんと報酬がもらえる。」

「まあ、実戦の経験になっていいんじゃない？」亜弥子がフォローする。

「さあ、この部屋だ。この部屋には神功霧夜旅帥じんくうきりやという人がいる。

ここからは、君達二人だけで行ってくれ。霧夜旅帥なら、君達の面倒を見てくれるだろう。」男はそう言つて、立ち去つた。恐る恐るその部屋の扉をノックしてみる。

「入つていいですよ。」若い男の声が聞こえた。

「真人から聞いている。君達がその気なら是非魔術局に入つてほしい。」

「私は入りたいと思います。」亜弥子が即答した。

「で、君は？」僕は少し悩んだ。確かに、自分の力を試したいという気持ちはある。しかし、父親が死んでから僕は黒法師家の当主なのだ。少し自重しなければならぬ。

「ならもし、君はここで断つたら何かしたいことがあるの？」旅帥のその一言で決心がついた。

「僕も入ります。」

「では、今から君達の力量を知るためにいくつかの試験をやつてもらう。」

「試験つてどんなことをするんですか？」

「君達は戦術に関しては何の問題もないだろうから、いくつか筆記試験を受けてもらう。あくまで確認だからそんなに緊張する必要は無い。」と言つて、旅帥は試験用紙を配つた。横では、亜弥子ももう次々と解いていつている。僕も解き始めた。

（第一問：五行とは、水、金、火、木と何か？）答えは土だ。この程度ならいける。そう確信して次々と問題を解いていった。そして、最後の問題。

（最終問：六道家と黒法師家と神奈備家の三家に共通することは？）最後の問題はラッキー問題だった。自分達の一族が闇の国の魔術局の筆記試験に使われているのは少し変な気分だったが、大概の問題が分かつて安堵した。程なくして旅帥は、
「やっぱり、君達は最終問題に引つ掛かったか。実は、この問題は君達専用につつたものだ。二人とも、（古代魔術を遺伝的に受け継ぐ性質がある。）と答えている。それでも、間違つてはいない。し

かし、最も大きな共通点を見落としている。お互いを敵視していた三家だから、君達には教えなかったらしい。君達もそのうち、知ることになるだろう。」

「なんで、今言ってくれないんですか？」

「知ったところで今の君達にはどうにもできない。」僕は、旅帥は意地悪そうな人間には見えなかった分、一層不思議に思った。

「そろそろ時間だ。急なことだが、君達にはすぐに任務についてもわからないといけない。それも別々の。優君は下の階の音羽隊正の所へ、亜弥子ちゃんは私の所へついてきなさい。」こうして、下の階に一人で行く事になった。音羽隊正は僕のことを結構な時間待っていたようで、なにより音羽隊正は御饌津大社で出会った男だった。

「初陣にしては、重責すぎるかもしれないけれど、君には水の都でこの任務についてほしい。」音羽隊正は一枚の書類を僕に渡した。書類には任務の詳細が書かれていた。

「どうやら、最初から命の危険が伴う仕事だ。戦時中とはいえこの措置は異例だ。くれぐれも、はしやぎすぎないでほしい。」音羽隊正の表情は険しかった。

第四話「水都事件」

「この書類に書いてあることって、」

「そうだ。闇の国の進退を決めかねる重要な任務だ。正直今の闇の国の戦力じゃここを落としたりもう勝ち目はないだろう。事態は急を要するから君には急いで水の都へ向かってもらう。俺も後で行く。」音羽隊正は焦っていた。

それから一日半後、僕は水の国との国境に辿り着いた。不安で心が一杯で何も食べていなかった所為か空腹を感じる。しかしここで兵糧を食べるのは野暮だと自分に言い聞かせていたら、頭上から音羽隊正が舞い降りてきた。

「水の都は、ここからだ」と国境を越えてすぐだから当然防御が固い。ここを看破するには少数精鋭しかない。そこで、まず俺が囫として敵の前に姿を見せるから、君はその隙を突いて見つからないように水の国に入ってくれ。俺は、敵を振り切った後後続部隊と合流して水の都を攻める。一人で大変だろうが健闘を祈る。」音羽隊正は早口にそう言つと、

「では、始めよう。」と言つて国境を越えて言った。音羽隊正は囫としての役目を果たしたのだろうか。恐る恐る僕も国境を越えてしまった。後戻りはできない。その刹那、毒矢が僕の数十cm横を掠めた。

「そこにいるのは分かってる。出て来い。」草薙から身の丈が僕の倍近くある大男が部下を引き連れて現れた。

「こんな子供一人だけを潜入させる訳が無い。他にも味方がいるよ。うだ。お前ら探せ！」大男は部下と共に去って行った。音羽隊正はどうやら僕のような子供一人だけが国境を越えるとは敵は思わないだろうと考えたから僕を一人で行かせたのだろう。本当に侮れない人だ。隊正の言う通り、水の都はそう遠くなかった。任務令状によ

ると、地下の武器庫を爆破しなければならぬらしい。地図は同封されていないので自分で探すしかないらしい。戦時中の為か、大通りも閑散としていて、その分、見通しが利く。

「地下の武器庫なんてどうやって探すんだ？」なるべくならこんな所に長居はしたくない。早く任務を済まさなければ。まずどこでもいいから、地下に入ろう。近くの地下鉄の駅に入った。本来なら地下鉄の駅として人々でごったがえしているはずなのだが、今は使われていないみたいで電気すらついていない。昼間とは言え地下深くなので日の光がほとんど当たらず中は真っ暗だった。仕方ないので、僕は光を点した。

「火巫祀光明憑顕現……」僕の傍に光が点った。周囲は、大砲など様々な武器が犇つめいてる。どうやら、これを爆破するらしい。ぼくは、もう一度

「火巫祀火之迦具土神召喚演舞……」と魔術呪詛を唱えた。あたりは、急激に明るくなりその瞬間何も無い空間が広がっていた。

「さて、これで任務が終わったし帰るか。」僕は闇の国境へ戻ろうとした。そういえば音羽隊正や後続部隊が到着していない。途中で何かあったのか、と心配していた矢先、上の方で大きな爆発音が聞こえた。僕は階段を上り地上へと出たら、入ったときは全く異なる状況だった。

「優、急いで逃げろ！何が起きたかわからないがここは危険すぎる！」音羽隊正が叫んだ。僕は我武者羅に走り続けた。どれだけ走り続けたらどうか。気付くと、音羽隊正の姿が見えなかった。そのかわり、目の前には僕と同じ容姿の少年が立っていた。

第五話「御三家」

しばらく、僕は一体何が起こったのか把握出来なかった。向こうもそうだったようで、お互いに沈黙が流れる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」世の中には自分とそっくりな人が三人いるなんてことを聞いた事があるが、目の前の少年はそっくりどころか、鏡に映った自分の姿を見るようだった。

「お前、誰なんだ・・・？」僕は無意識にそう呟いていた。

「僕は、黒衣聖。黒法師家嫡流の人間だ。」

「僕は、黒衣優。同じく黒法師家嫡流の人間だ。」

「僕達は双子の兄弟か何かなのか？」二人同時に叫んでいた。周囲の家の窓から何人かの人が僕達を眺めている。

「自分の双子がいるなんて聞いた事も無い。」聖は言った。

「僕もだ。」

「もしかして、双子だと後継者争いが起きるから敢てこの事実を伏せていたとか？」

「だとしたら、黒法師家本家の下で育てられた僕が兄で、水の都にいるお前が弟？」

「おーい、優。探したぞ！」音羽隊正が僕達の所へ駆け寄ってきた。音羽隊正は当然、

「なんで優が二人いるんだ？」と僕達に問いかけた。僕は経緯を音羽隊正に話ると、

「そんな話、実際にあるんだな。」と驚いていた。音羽隊正は聖に、「聖君も闇軍の陣地に来ないか？」と御饌津大社で僕と亜弥子に言ったように語りかけた。

「はあ。」どうも、渋々といった感じで聖は音羽隊正と僕と共に闇軍の陣地に来た。そこには、神功旅帥と亜弥子がいた。

「疲れているだろうが、任務報告だけしてくれ。」神功旅帥が僕に

言った。

「地下の武器庫は予定通り爆破成功しました。それに、僕の双子の弟らしい人に会いました。」

「君には双子の弟がいるのか？」

「どうもそうみたいなんです。」 旅帥も隊正と同じようなりアクションだった。

「で、君が優君の双子の弟の、」

「聖です。以後お見知り置きを。」 聖は素っ気無く社交辞令的な挨拶をした。

その夜、僕と聖と亜弥子は三人で帷幕の片隅で色々な話をして盛り上がった。

「優や聖の他に兄弟はいるの？」

「姉が四人いる。」 聖は僕の事は知らなかったらしいが、姉の事は知っていた。

「なんで、家族と離れて暮らしていたのに知ってんの？」

「姉はたまに僕の家まで来てくれた。多分僕ら自身を除く黒法師一族は全員僕達双子のことを知っていたんだろ。」

「亜弥子には兄弟とかいるの？」

「私にも姉がいるから、私は跡継ぎじゃないんだけど、姉とはあの時以来音信普通で……」

「神奈備家のことについては、何か知ってる？」 聖が尋ねた。僕はそこまで気が回らなかった。聖は結構頭の回転がいいのかもしれない。

「神奈備家にも私達と同年の神奈備桃子って子がいて、昔はよく遊んだりしてたよ。」

「じゃあ、六道家と神奈備家は敵対関係ではないってこと？」 聖は矢継ぎ早に質問していく。

「私が生まれた頃にはとっくに。」

「まさかとは思っけど、神奈備家も皆殺しに？」 僕も亜弥子に訊い

てみた。

「うん。実はそうらしいの。」

「その神奈備桃子って子は今何処に？」

「実はお姉ちゃんと一緒に逃げて、私が間違えて黒法師領に迷い込んでしまったみたいで、」

「この戦争が終わったら、一度僕と聖で魔国六道領か神奈備領に行ってみるか。」僕は、黒法師家・六道家・神奈備家（合わせて御三家）の和解という魔界史上でも大きな転換になるであろうことについてこの時は少し本気になっていた。

第六話「水都の名軍師」

翌朝、早朝から神功旅帥に起こされた僕達。

「こんな朝早くから、何ですか？」僕は寝起きが悪いが、双子の聖はどうやら朝の目覚めがいいらしい。

「突然のことなんだが、昨日の夜遅く、終戦条約が締結されたという連絡が届いた。だから、今から闇の都に帰る。」僕は、一瞬旅帥の言ったことが信じられなかった。実際は数ヶ月続いた争いだったが、僕にとっては、僅か数日の出来事でしかなかったからだ。

「でも、なんで急に終戦条約が締結されたんですか？」僕達全員の疑問を亜弥子が言った。

「謎の武装集団が水の都を占領した。急遽水の国の国王が、闇の国に和解を申し込んだ。」

「では、昨日の騒ぎはそれに関係していたんですか？」僕が尋ねた。「おそらくそうだろう。何にしろ、うちも戦力がもうギリギリだったし戦争が終わってよかったんじゃないのか。」

「あ、音羽隊正。」亜弥子が指さした方向から、音羽隊正が息を切らしながら走ってくる。

「早速、闇軍と水軍の共同任務だ。水の都を占領した武装集団と戦ってほしい。」

「おい、音羽。この子たちは、昨日も命からがら逃げ帰ってきたんだから、今日は勘弁してもらってもいいんじゃないか。」

「君達はどうする？」音羽隊正は、僕達に尋ねた。僕は何の造作もなく武器庫を爆破しただけだし、聖は戦ってもいないし、亜弥子は陣地を守備していて誰も攻めてこなかった。僕達の体力は有り余っている。当然答えは、

「参加します。」一人何も言っていない奴がいる。

「聖は参加しないの？」

「ちよっと待って下さい。相手が水の都を占領しているのなら、僕

達が迂闊に攻撃すると知ったら、人質をとることも、街を破壊することも当然起こりうるでしょう。ここは、急いで行動に出ずに、相手の意図を読んだ方がいいんじゃないでしょうか。それに、相手の人数や戦力は把握できているんですか？できていないうちに、こんな中途半端な小隊一つ送り込んででも返り討ちに逢う可能性が高いんですよ。」

「君には、軍師の才能があるようだ。だが、事が起きてからでは遅い。」それまで、口を噤んでいた旅帥が口を開いた。

「勿論、君が臆病だとは思わない。むしろ、こういう時に冷静に判断できることはいいことだと思うよ。」

「時間が無い。作戦は向こうに行ってから立てよう。」音羽隊正が言うと、それぞれが水の都へ向かった。

僕は、昨日も水の都へ来たが、昨日と同じく殺伐とした雰囲気だった。

「今日は十字型の布陣で行く。俺は、左右を飛び回って、全軍の戦鬪調整を行う。神功旅帥は、陣頭に立って一気に攻め込んで下さい。仙静旅帥は、殿軍に回って、退路の確保や防御の援護を。雲月は中軍で指揮を執って。優は雲月の、亜弥子は神功旅帥の、聖は俺の補佐に回ってほしい。」音羽隊正が言った。僅か七人の部隊で得體も知れない敵に立ち向かうのだから、僕達はともかく大人達も緊張していた。

第七話「魔道具」

「優君。」雲月隊正が僕に言った。

「なんですか？」

「まずは、敵の中枢を見つけるまでは表面的な侵攻を行わないで。」

「もう、僕達は見つかったいるんですから今更……」その瞬間、後ろから矢が飛んできた。

「おちおち偵察も出来ないってことみたいね。ここは、私が片付けておくから。」シューという音と共に、敵は抗う暇もなく溶けて言った。

「え、これって……。」

「私達はなめられているかもね。屍繰りなんて初歩的な魔術をこうも堂々と使うなんて。」

「油断は、できませんけどね。」

それから三時間ほど経過したが、さっきの屍以来何も出てこない。

「もしかしたら、もう逃げられたのかも。」

「優君、早計すぎるって。ほら。」僕と雲月隊正の目の前には、多重結界が張ってあるコンテナがあった。

「これ、重要なものなんでしょうか。重要なものなら、こんな簡単に見つかるわけ無いですよ……。」

「まあ、結界を破壊してみようか。私こつちからやるから、優君そつちから頼んだ。」

「「妖巫並魔巫封術式多重結界放気散神通……」この術、簡単なわりに呪詛が無駄に長い。急いでいるときにこれはどうかと思っていたら、結界は解かれなかった。」

「確かに、ちゃんとやりましたよね。なんで結界解かれないんですか？」

「さあ。とりあえず、もう一回やってみようか。」

「妖巫並魔巫封術式多重結界放気散神通……」結果は前と同じだ。ん、これまさか……

「雲月さん。これは、多重結界じゃなくて魔道具なんじゃないですか？」

「そんな、魔道具なんてあるの？」

「黒法師家の宝物庫にあつたんですけど、人力を介さなくても自動的に魔道具が魔力を行使するというものがあるんです。当然、普通の多重結界とは違うので、普通の多重結界破壊は通用しません。これを破壊するには、その魔道具の属性術式の解除術をかければいいはずです。」

「で、これ何属性なわけ？」

「恐らく、一般元素系ではなく、特殊元素系だと思うんですけど……妖巫か魔巫のどちらかってこと？」

「多分そうですね。」

「妖巫妖術解除」「何も起こらないってことは、魔巫？」

「魔巫魔術解除」「何も起こらない。まさか、

逃げましょう。」

「え？」とりあえず逃げた。

「なんで、あの場を離れたの？」

「あれは、罠です。恐らく、あの場所に敵を縛り付けておくことを目的とした魔道具で、最初から何の効果もないんですよ。それで、外部からの刺激を受けると敵に情報を送ったり、それ自身が魔力爆発を起こすという仕掛けですよ。」

「あなた、実戦始めてなのによくそんなこと気付いたわね。」

「黒法師家にそういう胡散臭い魔道具がたくさんあるんです。」

「でも、これでまた振り出しに戻ったわね。」

「他の人達は、何か探し出せたんでしょうか。」気が付けば、もう日没まで時間が無い。暗くなつてからでは、絶対に敵を発見することとは不可能だろう。最も、敵が自ら現れるのならば別だが。そういえば、昨日の武器庫、あそこにはまだ行っていない。僕が破壊した

はずだが、あそこは恐らく隠れたり物を隠すのにはうってつけだろう。

「僕、昨日武器庫を破壊したんですけど、その武器庫に行ってみますか。」

「行くのなら、まず全員を集める必要があるわね。私達二人だけでは、危険すぎる。ほぼ自殺行為に等しいわ。」

「他の人達を呼んできますか。」

「どうやらその必要はないみたいけど。」ちょうどいいタイミングで他の人達が合流して来た。仙静旅帥が、

「今日はもう引き上げるか？」と言った。

「昨日の武器庫に最後に寄ってみました。」

「そこは入口付近だけ調べたんだが、興味深いものが見つかった。もともと、地下鉄の駅や魔道具ではない武器を保管する武器庫なのに魔力探知の術式がかけられてあった。普通、武器庫の入口には怪しまれるからこんな代物を置くはずが無いんだが、、」僕は、武器庫跡へと向かった。

「ねえ、優。敵ってどんな感じだと思う？」

「さあ、、」「敵」という言葉を耳にすると、必然的に黒法師家を皆殺しにした犯人を思い出す。今思うと、優しかった姉には死んでほしくなかったが、父親に対しては喪に服そうなんて気持ちがなかった。

「話変わるけど、六道家の当主ってどんな人だった？」

「六道家の当主は私の父親なんだけど、一族の地位や名誉が第一で家族のことをあまり省みなかった。家にもあまり帰ってこなかったからそんなに思い出が無い。あと、神奈備家の当主もそうだった。」御三家の当主になると、そういうことにしか頭が回らなくなるかと思うと、少し悲しかった。僕も、今となっては黒法師家当主なんだ。。。

第八話「亜弥子の決闘」

武器庫に近づけば近づくほど、自ずと僕達の間にも緊迫した空気が流れ、全員が口数を減らした。僕も、一步一步敵に近づいていくと思うと足が竦む。隣にいる亜弥子は僕にも聞こえない程の小さな声で何かを呟いている。亜弥子に何を言っているのかと尋ねようと思った瞬間、

「優、こちらへんか？」仙静旅帥が僕に尋ねた。

「こちらへんの地下です。入口が確かこの近くにあつたはずですけど……」そういえば、昨日は簡単に見つけたのに、今日はなかなか見つからない。暫く入口を探していたが、それらしいものは一切見当たらなかった。

「まさか、僕達の気配を察知して、入口を封鎖したとか、……」聖が言った。

「そうなれば、探すのは困難だ。どうすればいいと思う？」神功旅帥が僕達に尋ねた。

「もしかして、これのことか？」音羽隊正が言った。

「何か見えたか？」

「目視では確認出来ませんが、明らかに何かを隠しているものと思われるものがあります。」音羽隊正は、魔力探知を視覚的に捉えているのか。まさか、音羽隊正はあの一族の末裔なのか。でも、あの一族の子孫が今でも生き残っていてしかも、闇の魔術局にいるわけがないよな。僕は、小声で恐る恐る音羽隊正に尋ねた。

「あの……。音羽隊正つてもしかして、祇園一族の末裔だったりします……？」

「鋭い洞察だな、優。その年で、祇園一族の特性をも把握しているのか。やっぱり、俺の見込んだ子だな。」音羽隊正は、少し誇らしげに言った。

「実の所、このことは誰にも話していない。それに、誰にも話すつ

もりはない。君はそれを、出会ってから一週間ちよつとで気付いたか。」音羽隊正の表情が少し険しくなった。

「僕は誰にも言いませんよ。」

「それは、有難いな。頼んだぞ。」

「おい、入口が開いたぞ！」仙静旅帥と神功旅帥が言った。

入口は人一人がやつと通れる程にまで崩れていたが、意外と中は元々の地下鉄の駅と何ら変わりなかった。空気中に異常な程の強い魔力が漂っているのを除けばだが。ホームへと続く階段を下りると、そこにはホームではなく長い長い回廊が続いていた。

「結構、遠いのね。」雲月隊正がもらした。

「逆に、何にも無いと罠に警戒しちまうなあ。」神功旅帥も少し起源が悪そうだ。回廊は思ったよりも長かった。

「これ、きつと水の都の外に出たんじゃないですか？」聖が言った。

「まあ、愚痴る気持ちも分かるが、このくらいの距離だし、しかも水の都の中心部に入口はあったんだから、水の都の外まで地下トンネルを繋げるという意味は敵にはないだろう。」さすが、仙静旅帥説明が理に叶っている。地下トンネルを数？ほど進むと、行く手には分かれ道が見えた。

「ここからは、手分けして進もう。俺と仙静は、左の道に。音羽と雲月は、前の道に。その、入口が狭いところは俺達じゃ入れないから優と亜弥子と聖で行ってくれ。」右の方の道は、入口が狭すぎる。一瞬、猫用の通路かと思ってしまう。入口を潜り抜けても、細いパイプのような通路は続く。

「痛、頭打った。」

「ちよつと、優。声が大きい。」

「ごめん。」数分進むと立って歩ける所に来た。周りが明るいので、少しほつとした。

「やっぱり、この道から進んでくる奴もいたか。」目の前に、細身で背の高い男が現れた。

「何しに来た？このクソガキどもが！」ものすごい剣幕で男は睨ん

でくる。

「風巫疾刃一閃！」たった一回の呪詛で、聖が吹っ飛んだ。聖は、血みどろの状態でそこに横たわっていた。

「金巫鋼斧落！」僕は、本能的に叫んでいた。命中すれば、相手を殺してしまう程の魔法だ。だが、相手には効かなかった。

「火巫火之迦具土神召喚演舞……」この建物は、火に弱いはずだ。

「水巫火術能却……」反対呪文だ。一体どうすればいいのだろうか。

「電巫雷神降誕聖域発動！」

「音巫超鼓炸！」

「妖巫魔力封鎖！」何をやっても相手には効かない。

「ここは、私に任せて。」亜弥子が言った。

「六道家に伝来せし術を使いしことを開祖に告げる。我此処に守るべき者あり、力を我に与えよ……」亜弥子が呟いていたのはこれのことか。黒法師家にもこういうような術はあるが、これは呪詛を言い始めてから発動するまで一時間くらいかかるから、こういう戦いには向いていない。亜弥子は、それを予知して予め、呪詛の前文を唱えていたのか。本当に亜弥子がいて助かった。

「六道巫飛車転韋駄刃臨界霊再蘇！」亜弥子の魔術は、この広大な地下鉄の駅を丸々一個吹き飛ばしてしまって、上を見れば、空が見える。向こうには、大人達の姿も見える。亜弥子がここまで強いとは思わなかった。これからは、亜弥子に逆らわないようにしなければ。

「誰がこんなことをやったんだ！」大人達は啞然としていた。

「私ですけど……」

「君は、俺が想像した以上どころか、数十年に一度の逸材を発掘したみたいだ。多分、今回の亜弥子ちゃんの軍功からすると早速士官に昇格できるかもしれないな。」音羽隊正は興奮して言った。

「でも、一人でよく水の都を占領できましたね。こいつ。」僕は、気を失っている男に指差した。

「それより、聖は大丈夫なんですか？」

「このくらいなら、三十分もすれば目が覚めるわよ。気にしないで。」
「雲月さんが、怪我の治癒をしながら言った。」
「この男を連れて行かなければならないな。」仙静旅帥が言った。
「まあ、これで一件落着ということだ。」神功旅帥がうまくまとめると、僕達は闇の都へと帰っていった。

第九話「冬の幕間」

僕達は無事闇の都に帰還した。水の都を占領した犯人は、餓王^{がおうだい}廼刹^{せう}と名乗る男だった。餓王なんて苗字は滅多に無い。恐らく、彼もどこかの一族の末裔なのであろう。取調べに対しては、黙秘を続けているらしい。

「まあ、そういう訳だ。取調べは我々の管轄外だから、しばらくはゆつくりしてもいいらしい。」音羽隊正は言った。ここは、神功旅帥や仙静旅帥、音羽隊正、雲月隊正の四人で構成される魔術師部隊南闇部隊の仕事場。今日は、音羽隊正と雲月隊正、そして僕しか来ている人はいない。

「こんな任務って日常茶飯事なんですか？」

「そんなわけないだろ。一応大国水の国の都が占領されたんだ。それも一人の男の手によって。こんなことがいつもどこかで起こっていると思うか？」

「そういえば、その餓王廼刹の影で糸を引いている組織とか人物なんかはいるんですか？」

「その可能性は多分ない。可能性があるとしたら、餓王廼刹が何かの組織の上層部であるということだ。」

「組織の上層部を送り込んでまで、水の都を占領する必要があったんですか？」

「理由は分からないが、その組織の目的途上で重要な部分を占めていることには間違い無いだろう。単独での犯行だとしても、ここまですぐ大胆なことをするくらいならそれ相応の対価があるはずだ。」

「水の都を占領することと等しいほどの対価か……」

「今はあれこれ考えたってわからないから、このことは考えないでおこう。」雲月隊正が帰って来た。

「どこに行ってたんですか？」

「任務の報告と事後処理よ。あれだけこいつは任務に張り切ってい

るのに、事後処理となると全部私に押し付けて。そんなことしてちゃ、そのうち竹箆返ししっぽがえを食らうから優君も気を付けときなさい。」雲月隊正には逆らわないように気をつけておこう。三人だけというのも、何か特別な雰囲気を感じる。特に音羽隊正と雲月隊正の間には。

「そういえば、亜弥子ちゃんのことなんだけど二人とも聞いた？ 伍長を飛ばしていきなり火長昇格だって。」火長というのは、一般的に准士官的なクラスの役職のことをさす。

「この前の軍功からしたらまあ妥当な人選なんじゃないの？ 確かに、まだ十歳だけど。」なんてことを話していた。

次の日も、昨日と同じ三人しか仕事場にはいなかった。昨晚聞いた話によると、神功旅帥と仙静旅帥は、早くも次の任務に着任して桃源郷村という闇の国東南部の景勝地付近に行っているらしい。聖は、怪我がまだ完全に治っていないらしく、治ったらすぐにでも魔術局に入るつもりだと言っていた。亜弥子は昇格後しばらく、休暇をとって魔国六道領に帰って姉や神奈備桃子を探しに行くらしい。今日も昨日と同じような感じなんだろうなあ、と思いつつ仕事場の扉を開けた。

「……………」僕は目の前の光景に驚いていた。昨日までただの同僚関係だった音羽隊正と雲月隊正の距離が異様に縮まっている。いや、これはもはやカップル……………」

「お、お、おはようございます。」

「優君、聞いて。私達付き合うことになったから。」雲月隊正がいつも以上に明るいい声で言った。カップルとカップル以外の第三者が一人だけ、というのはその第三者にとっては非常に過ごしにくい。仕方がない、ロビーにでも行くか。突然のことに驚いて少し意識が遠のいていたのだろう。

「痛っ！」誰かにぶつかってしまった。

「すいませんすいませんすいません……」

「君か。音羽隊正が言っていた史上最年少で魔術局に入った天才魔術師ってのは。」顔を上げると、四人組の男（十七、八歳くらい？）が僕の周りを取り囲んでいた。

第十話「六道家の真意」

——その頃、魔国六道領では。

「あなた、今までどこ行つてたの？」女が言った。

「闇の都に……」亜弥子が言った。

「闇の都？」女は少し苛立っているようだ。

「うん。」

「あなたが闇の都なんかに行っている間に、六道家と神奈備家は突然の当主交代で魔国中がえらい騒ぎになったのよ！なんか、黒法師家も当主交代したっていう話だし。そうそう。亜弥子、闇の都で何やってたの？」

「魔術局で仕事してました。。。」

「あ、そう。私てつきりただ遊び歩いてたんだと思っていて。まあ、あなたも六道家の人間なんだから少しは自重しなさいよ。」

「ところで、お姉ちゃん。黒法師家の当主のことなんだけど……」

「闇の都で何か手がかりでも掴んだの？」

「つていうか、魔術局にいて私の同僚だったっていうか……」

「で、殺したの？」

「え？」

「だから、殺したのかって聞いてんの。」

「殺したってそんな……」

「まさか、あなた取り逃がしちゃったの？折角のチャンスが無駄にして！」

「殺せるわけじゃないじゃない。私の命を助けてくれたようなもんだし。」

「どうせ、素性隠して近寄つたんでしょ。」

「いや、六道家の人間だって言つただけだ。」

「向こうが殺して来なかったの？」

「うん。」

「黒法師家の人間、しかも当主が六道家と自ら名乗っている人間を手につけないはずがないのに…」

「違うよ。優も聖もそんな人じゃないから。」

「じゃあ、当主が変わったら方針も変わるっていうの？これまでは【御三家を武力で征圧する】が基本方針だったじゃないの。」

「お姉ちゃん。黒法師家全体にそういうイメージ持ってる？」

「私だって持ちたくないわよ。」亜弥子の姉は少し黙った。因みに、亜弥子の姉で葉竹珊瑚は、六道家の当主であり、亜弥子より四つ年上である。

「亜弥子ちゃん。」この場においてこれまでずっと黙っていた神奈備桃子が話し出した。

「黒法師家の人間はあなたの信頼を得て、六道家や神奈備家に取り入ってから六道家や神奈備家を滅ぼすことだって十分に考えられるのよ。闇の魔術局なんか辞めて魔国六道領内に住めばいいじゃない。黒法師家と縁を切って。」

「いやだ！」亜弥子はきつぱりと言った。

「あなたが人に騙されるようなバカじゃないことは知っている。たとえ黒法師家の人間でもあなたが彼らを信用出来るなら彼らの元に行ってもいいんじゃない。」珊瑚が亜弥子に告げた。

「でも、私は亜弥子ちゃんがみすみす死んでいくようなところは絶対に見たくない！」桃子も負けじと反論する。

「これは、私達の一存でどうにかなる問題じゃない。朝臣議会に諮ってみるわ。」

「結果はどうだった、畝傍^{うねび}？」畝傍とよばれる部下の一人が亜弥子たちに言った。

「朝臣議会で話し合った結果、亜弥子様には魔国六道領にいないければならない、との判決が出されました。」

「そうなの。ありがとう、畝傍。」

「畝傍も言ってたじゃない。ここで縁を切っても黒法師家にはどう

することもできないのよ。御三家の中で今一番衰退している家なんだから。「桃子が亜弥子を宥めようと言ったが、亜弥子は何も言わずにその部屋を去って、自分の部屋に帰っていった。

第十一話「新たなる戦友」

また、僕の話に戻る。僕を取り囲んでいた四人組は、
「ちょうど良かった。神功旅帥と仙静旅帥がいない間、俺達が魔術師部隊南閤都隊に編入することになった。俺は、火長の攝津夜叉丸だ。よろしく頼む。」はきはきとした口調でリーダー格の男が言った。

「同じく火長のねぎのよしみね禰宜良岑だ。」その横の無骨そうな男が言った。

「俺達は、火長の天将玄武と天将青龍だ。よろしく。」天将家閤の国でも最も由緒ある家柄の一つだ。こんな一族の末裔でも、やつぱり魔術局にはいるものなのか。

「君のことは聞くまでもない。黒衣優君。御三家の一つである黒法師家の宗家で、しかも跡取りだ。音羽隊正に引き抜かれたんだろう。」

「どうせ、音羽隊正と雲月隊正二人の雰囲気についていけずに、出歩いていたらだろう。」夜叉丸火長は笑いながら言った。

「まあまあ、五人もいればあいつらの雰囲気飲み込まれないよ。」玄武火長が続けて言った。南閤都隊の部屋に入ると、先程と同じく

音羽隊正と雲月隊正が仲良さげに書類を整理していた。

「ああ、やっと来たか。あれ、夜叉丸って優と知り合い？」

「そんなわけないでしょ。今そこで会っただけだ。」

「そういえば、朱雀と白虎はどうした？」

「あの二人は明日からだ。」良岑火長が答えた。そう言えば、夜叉丸火長や良岑火長達と音羽隊正は妙に仲がよさそうだ。

「音羽隊正って、この人達と何か関係あるんですか？」

「魔術局の同期だ。今でも仲が良い。」

「ちよっと、みんな。手紙が届いているわよ。」雲月隊正が僕達に言った。

「えーっと、【突然ですが魔術局を辞めます。葉竹亜弥子】としか

書いてないけど。」

「亜弥子が？」僕はつい大声で言ってしまった。

「何か他に書いてあったのか？」音羽隊正が尋ねた。

「他には何も。」

「そうか。」

「お前ら、早速だけど留守番頼めるかな。俺と優で亜弥子の所に行くつてくるから。雲月はどうする？」と音羽隊正。

「私はここにいる。本当は優君一人で行ってもいいけど、行き先が魔国六道領なだけに。。。」

「葉竹姓つてまさか、六道家の子もいるの？」

「ああ。」

水の都の時以上の突然の出発に僕は慌てた。しかも、行き先は魔国六道領。

「行く途中に、一回黒法師領に行ってもいいですか？」

「構わないぞ。」僕達は、黒法師領の聖の所に行った。

「聖。」聖は怪我がまだ癒えず、黒法師家の城郭にただ一人でいる。

僕は経緯を聖に話すと、

「臣下たちも逃げ落ちたらしい。黒法師家最大の危機が迫っている中で、当主の優を行かせるわけにはいかない。」

「じゃあ、亜弥子はどうすんだ？次期当主なんて、聖がやればいい。」

「

「当主の座まで賭けてか。そこまでなら、僕は何も言わない。音羽隊正も頼みましたよ。」そう言つて、聖はまた寝室へと帰って行った。黒法師領と六道領は隣接しているので、そう遠くはない。

「北の御饌津山にちょうどここから直角の位置に、天神山がある。あそこを越えれば、六道領です。」僕達は、天神山へ目指して歩いて行った。

第十二話「六道領」

天神山は、それほど大きな山ではない。しかし、黒法師領と六道領の境界に位置する軍事的な要衝なので常に国境の衛兵で賑わっている。先代までの数百年間、一般人の往来を固く禁止していた為、この山の麓には衛兵の宿舎しかない。

「ご当主殿、そちらより先は六道領となっております。よろしければ、護衛の兵をおつけいたしますが。」ここの衛兵の飛梅と太宰の二人が僕に忠告した。

「戦争をしにいく訳ではない。物々しくやってくるほうが、逆に相手を勘違いさせてしまう。」二人はそれ以上何も言わなかった。

「あれだけのことがあった後でも、まだ領内では黒法師家の権力は強いんだな。」音羽隊正が驚きながら言った。

「子供二人しか生き残っていないと分かったら、どこで謀叛や叛乱が起こるかわかりませんけどね。内政を強化するのは必要不可欠ですよ。」

「ここから先が六道領か。心の準備はいいか、優。」

「はい。」天神山の峠を越えると、眼下に六道領が見えてきた。六道家の城まではここからまだ十数里（一里 4？）ある。

「一日で辿りつけるんでしょうか。」

「ここから先は、俺も知らない。まず、魔国に来るのは今日が初めてだ。あまり、俺を頼らないほうがいい。」

「黒法師領と同じく結構寂れてしまっていると思ったら、そうでもないみたいですね。」

「六道家は逸早く内政の充実に着手しただけのことだ。まだ、俺達には気付いていないみたいだから、少し急いだ方がいい。」数十里の道といえど、平地なので速いペースで六道家の城に近づいていた。

「この調子なら夕方くらいには着きそうですね。」

予想通り、日暮れ前に六道家の城門前まで来れた。

「早速、中に忍び込みますか。」

「待て。堂々としていた方が相手に敵意を与えない。別にこの城を攻めに来たわけじゃないだろう。」僕達は、城門の門番に言った。

「闇の国の魔術局の者だが……」音羽隊正が門番に話しかけた。

「亜弥子様のお迎えでございますか。」

「ああ。」

「このことに関しては我々一介の門番が入城を許すわけには参りませぬ。畝傍朝臣殿にお尋ねして参りますのでしばしお待ち下され。」
 といって、門番は駈けて行つた。

六道家城内では。

「畝傍朝臣殿。」

「なんだ、手向。私に用があるのか。」

「闇の魔術局から二名の使者が参りまして、亜弥子様をお迎えに来たらしいのでございます。」手向という門番が早口に報告した。

「そんなことは、亜弥子様本人にお尋ねしなければわからないだろう。すぐに、亜弥子様の所へ行きなさい。」

「何？どうしたの、畝傍に手向？」亜弥子が奥の自室から出てきた。闇の魔術局からの使者がお見えになりました。」

「手向、使者は何人でその人達の特徴は？」

「二人組みの男で、一人は二十歳ぐらい、もう一人は亜弥子様ほどの年齢です。」

（音羽隊正と優か。）

「城中に迎え入れられますか？」

「……」亜弥子は悩んだ。確かに自分自身は彼らを信じている。しかし、優は黒法師家の当主。裏切られても妥当な立場だ。でも、優はそんな人じゃない。心の中では、もう一度闇の魔術局に戻りたいという気持ちが強かった。しかし、桃子の言ったことを思い出す。

（「私は亜弥子ちゃんがみすみす死んでいくようなところは絶対に見たくない！」）どちらにしても、私のことを案じてくれている誰かを裏切ることになる。誰も傷つけたくはない。一体どうすれば、

「畝傍。どうすればいいと思う？」

「どんな状況でも自分に嘘をついてはいけません。亜弥子様は優柔不断になっておられます。どちらにもリスクがついてくるのを始めから分かっているのです。そこでは逃げてはなりません。」

「畝傍：」亜弥子が少しの間を置いてから、

「決めた。」

「どうなされますか？」

「私は、もう一度闇の魔術局へ行く。桃子ちゃんには悪いけど、私の信念は変わらない。音羽隊正と優には私の口から伝える。手向、二人を城中に迎え入れて。」手向は城門まですっ飛んでいった。

第十三話「亜弥子と桃子」

亜弥子は僕と音羽隊正に事情を話してくれた。

「そうだったのか。それより、六道家と神奈備家が手を組んでいることの方が驚いたな。」

「今の状況だと、六道家も神奈備家も単独だとやっていけないのが現状だからこうするしかなかったのよ。」

「場合によっては、黒法師家は危険の芽を潰す必要性が出てくるかもしれないな。亜弥子、両家の当主に合わせてくれないかな。」僕は一応、六道家と神奈備家を牽制する発言をしておいた。しばらくすると、六道家の当主がやってきた。

「私が六道家当主で亜弥子の姉の葉竹珊瑚。よろしく。」

「黒法師家当主の黒衣優だ。神奈備家の当主はここにはいないのか。」

「いないよ。」

「そうか。」

「で、私に何の用？」

「六道家と神奈備家が手を組んで、今度こそ本格的に黒法師家を倒しに来るつもりか？」

「そんなつもりは今のところないわ。あなたは心配しなくていい。」

「これまでの歴史の中にも相手を油断させておいて攻め込んだきた例はいくつもある。その程度のごまかしで黒法師家を騙せると思うな。」双方の間に嫌悪感が流れた。

「あなたこそ、何のつもり？こんな所に短剣入れて。」珊瑚が僕の服の裏ポケットに手を入れて短剣を取り出した。

「六道領に入るときの護身用に決まっているだろう。たった二人の軍勢、しかも一人は闇の魔術局員だ。そんな自殺行為をするように見えるか？」

「そうピリピリしなくてもいいじゃない。私達に敵意はない。」

「・・・」

「優、その程度にしておけ。何度も言うが戦争に來たわけじゃない。音羽隊正が僕を宥めた。」

「あなたには関係ない。それより、早く六道領を出たほうがいいんじゃないんですか？次の任務もあることだし。」僕だって争い事は嫌いだ。然し、ここで黙って六道家の言いなりになるのはもっと困る。拘りあわないのが最善策だと思う。

「優。」亜弥子が僕に言った。

「何だ？」

「どうせ六道家とは拘りあわずにおこうなんて考えているでしょ。あなたも黒法師家の当主なんだから、逃げようなんて思わないことね。」亜弥子は珍しく機嫌が悪かった。機嫌の悪い亜弥子を見るのは初めてだ。六道家に対しての僕の態度に怒るのは致し方ないが。

「優、あなたは自分と黒法師家どっちが大事なの？」亜弥子は語気を強めて言った。

「黒法師家は僕の全てで、僕は黒法師家の全てだ。」

「一族に殉ずるの？」

「殉ずる？せめて僕の代の内は、黒法師家は六道家や神奈備家に潰されないようにしてやる。」

「強気ね。どこにそんな根拠があるの？」

「根拠は、六道家や神奈備家の敵意に基づいている。亜弥子が知らないのに、なんで黒法師家の人間が知り得るんだ？」亜弥子はそれ以上何も言わなかった。音羽隊正は自分達の前を進んでいて、僕達の会話は聞いていない。

「帰りは桃源郷村を通るぞ。」音羽隊正が僕達に向かって言った。桃源郷村は闇の国と六道領との国境にある村だ。多分、神功旅帥と仙静旅帥の所に行くのだろう。

「それと、二人とも何さつきから喧嘩してるの？ちゃんと聞こえたから。」音羽隊正が言った。

「何度も言うがあなたには関係ない。」

「そりゃ、俺は黒法師家や六道家には何の関係もない。だが、お前の上司だ。」

「魔術局の上司にそんな権限は……」僕が言おうとした時、

「優が六道家の当主を見ていたときの目、憎しみに満ち溢れていたな。何か六道家との間にいざこざが昔あったんだろ。」

「……」

「そうなんだろう。」

「……」

「あつたわ。」亜弥子が代わりに答えた。

「今から数年前、私達が確か六、七歳の頃に六道家と黒法師家の軍が天神山で衝突したの。合戦は数ヶ月に及んで、双方とも数千人の犠牲者を出した。優、まさかあなたあそこの軍にいたんでしょ。」

「うん。あそこで指揮を執っていたのは僕だ。あの時、僕は初めて人を殺したし仲間が殺されるのを見た。あの時はとても戦慄した。

死ぬかと思った。それに、あの時六道家側の指揮を執っていたのは葉竹珊瑚だ。初めて亜弥子にあつたとき、俺は殺すかどうか迷っていた。あのとき殺していたら、今はもうすでに黒法師家と六道家は空前の規模の大戦争が起きていただろう。」

「わかった。それなら、あなたの結論を聞かせて。六道家や神奈備家と戦争するか、それとも和解するか。」

「今すぐには黒法師家には戦争を始められるほどの軍力は不足している。だが、和解する気もない。機が熟したら、いつでも事を起こすつもりだ。僕達はお互いそういう運命なんだ。」

「運命はいくらでも変えられる。あなたが嫌なのは六道家や神奈備家と和解することじゃなくて降伏する事。非戦協定さえ結べばそれでいいって思ってるでしょ。」

「その策は平和を求めているように見えて、臆病風に吹かれているだけだ。」言い終わるか言い終わらないかの内に、亜弥子が僕に掴みかかった。

「優。あなたは六道家と神奈備家を滅ぼすことしか能がないバカな

の？こつち親切に敵意がない事を明白にしてやったのに、それでもまだ不満なの？それとも殺戮が楽しいの？」亜弥子は完全にキレていた。その時、僕は自分がしたことに気付いた。

「亜弥子、ごめん・・・」亜弥子はまたいつもの美少女に戻った。

「あなたには失敗を犯させてほしくない。それだけよ。」僕は六道領に行つて良かった気がした。

「さ、ここが桃源郷村だ。」音羽隊正の案内で僕達は桃源郷村に着いた。なぜ神功旅帥と仙静旅帥を訪ねたのかは分からないが、音羽隊正の事だから何か意図があるのだろう。僕の頭は次の任務の事で一杯になった。

第十四話「翳鬼」

「ひまね。」亜弥子が溜息交じりに言う。

桃源郷村の旅籠の一室で僕と亜弥子は何をするでもなくただそこに座っている。

こうなつたのには訳がある。実は数時間ほど前に桃源郷村に着いたのだが、音羽隊正はすぐに僕達を部屋に連れて行って自分は霧夜旅帥たちとどこかへ行ってしまった。

「でもなんで部屋から出るなつて言われるんだ？」

「外に行くと何か危ないからじゃないの？」

「闇の国にそんな治安の悪いところつてあるの？大体僕は六道領に行つた後なのに。」

「それもそうね。多分あの人達何か私達に隠し事してるんじゃない？」

「じゃあ、窓から外に出てみる？僕らだつて一応魔術局員なんだから多少の事なら何とかなると思うけど。どうする？」

「行ってみる？」

「とりあえず見てくる。」僕が窓から飛び降りた。二階なのでそうは高くない。

「大丈夫そうだよ。」亜弥子が窓の棧に手をかけた時、

「何が大丈夫なんだ？」音羽隊正が僕の後ろに立っていた。

「まあ、充分説明しなかった俺も悪かった。実は、この近くに翳鬼えいきという化け物が出るんで俺達は来たんだ。

「化け物って何ですか？そんなのいるわけじゃないですか？」

「そいつの正体人間で化け物のふりをしているというのなら説明がつくがな。」

「でも翳鬼えいきって聞いたことないですけど。」

「まあ、君達は知らないだろうな。五年ぶりに現れたんだから。まあ、簡単に言うと殺生を愉しんでいる奴だ。俺の母親も殺された。

一緒にいた俺の弟も何かの呪詛のせいで五年間ずっと入院している。」
「そうなんですか。」音羽隊正の母親と弟がそういう目にあつたのなら僕達を出歩かせたくない理由が分かるような気がする。ここで無理に大丈夫、とかいうのも野暮だろうからおとなしく部屋に戻るう。

「聞いてたわよ。音羽隊正の話。」

「でも翳鬼って一体何者なんだろ？」

「そういえば、外が何か騒がしくない？」窓を覗くと村が火の海になつていて、村人が逃げ惑っている。

「翳鬼だあ！翳鬼が来たぞ！みんな逃げろ！」一人の村人が叫んでいるが、あえ無く何かに屠られた。

「もしかして、あれが翳鬼か。」

「人を殺すのに躊躇しない人間なんて始めてみた……」さすがに、僕だけでなく亜弥子も言葉を失ったようだ。しばらく呆然としていると、仙静旅帥が部屋に入ってきて、

「ここはもう安全ではない。急いで隠れるぞ！」仙静旅帥について僕達は階下に行りて行った。階下でも人々が逃げ惑っていた。その時、旅籠の扉が開いて

「火巫祀火之迦具土神召喚演舞……」先程見た翳鬼が人々を燃やし尽くした。

「お前達は魔術局の回し者か！」低く野太い声で僕らを罵倒するように翳鬼は言った。もう逃げられない、そう悟つたらしく仙静旅帥は、

「覚悟してくれ。今度はかりは誰も助けられないぞ。」

「火巫祀火之迦具土神召喚演舞！」もう一度翳鬼が今度は僕達に向かって火を吹いた。

「水巫臥龍演舞！」亜弥子がとつさに反対呪文で防御した。実践の時には亜弥子の目が変わる。そしてそのままの勢いで僕が持つてい

た短剣を奪い取って翳鬼に投げた。翳鬼は難なく交わした。亜弥子の目的はどうやら、向こうに敵意を示すことらしい。

「汝、我を敵に回すか。宜しいのだな。その度胸だけは認めてやる。大した女だ。」少し笑みを浮かべながら翳鬼は言った。

「火巫祀火之迦具土神召喚演舞！貴様らごときこれで充分だ！」

「水巫臥龍演舞！」亜弥子がまた反対呪文で防御する。

「妖巫惡来刀一閃！」先ほどの術とはわけが違う。仙静旅帥がこれを防御しようとして失敗してそこに倒れこんだ。

「仙静旅帥！大丈夫ですか？」反応がない。心臓が止まった。僕は人の死をこれほどまでに痛感したことがなかった。なんとも言えない恐怖感と罪悪感で僕の胸は一杯になった。

「死人の相手をする余裕があるか、小童が！」次は僕に向かって呪詛を唱え始めた。

「妖巫惡来刀！」僕は思い切り翳鬼に突っ込んだ。

「何をする小童！」

「人を殺しておいてそんなに自分が死ぬのが怖いか？」僕はハッタリをかましたつもりだが、僕の手は完全に翳鬼に掴まれた。

「実体があるってことはやっぱりお前人間か。」

「俺に触れる事が出来たのはお前が初めてだ。こんなガキがな。おもしろい。だが、これが最初で最後だろう。」翳鬼は拳を挙げた。

万事休す、と僕が思ったら

「やつと姿を現したか翳鬼。お袋と泰臥の仇！」音羽隊正と神功旅帥が援護に来た。

「祇園一族の人間か。お前も死にたいか？こいつのように。」翳鬼は仙静旅帥の死体を指差して言った。これが、翳鬼か。絶対的に精神を支配するように翳鬼が僕に微笑みかける。

「お前もついでに死ね！」

第十五話「無限の殺生」

翳鬼は僕に、先程亜弥子が投げた短剣を向ける。

「自分の剣で死ぬのか。」翳鬼は少し笑みを浮かべている。こいつにとっては一人殺すのなんて屁でもないのだろう。翳鬼は僕に刃を振り下ろす。

その時、音羽隊正が翳鬼に、

「金巫鍊薙刀！」と翳鬼の油断を誘う。僕はその隙に翳鬼の手を掻い潜って抜け出した。

「一時の気休めだな、小童めが。余生をせめて愉しむがよい。」

「お前で祇園一族を殺すのは三人目か。」今度の標的は音羽隊正らしい。さっきは、ものの数秒で仙静旅帥を殺めた奴だ。音羽隊正もただでは済まされないだろう。

「優、亜弥子。裏口から逃げろ！俺と音羽は放っておいて。」神功旅帥が僕達に言った。

「私達も戦います。」亜弥子が言った。

仙静旅帥は、鬼のような面相で、

「逃げろ！」と一喝した。僕は自分が何の助けにもならなかったという不甲斐無さと仙静旅帥を自分の目の前で殺されてしまったときの罪悪感がこみ上げてきた。

命からがら逃げ延びた僕達は、その夜数里程離れた村の厩に隠れた。目を覚ますと昨晚とは打って変わって長閑な朝だった。

「そろそろ、夜も明けたしもう一度桃源郷村に戻ってみよう。」僕は、亜弥子に賺さず言った。

桃源郷村は昨日の火事と殺人の為、路頭に迷う人々で一杯だった。昨日の旅籠までの道のりが長く感じられた。旅籠の門扉を開けると、何ともいえない血の匂いが漂っていた。

「うつ！」さすがにこの匂いはきつい。それ以上にこの血の匂いが音羽隊正や神功旅帥のものでなければいいのだが。

しかし、嫌な予感が的中してそこにはぐったりとした音羽隊正と神功旅帥、そして仙静旅帥の姿があった。念のため、音羽隊正と神功旅帥の脈や瞳孔反射を確認してみたが、死んでいた。

「これが現実なの……」と呟いて、亜弥子はあまりのことに僕の横で気を失ってしまった。僕は、村の人達を寄せ集めて死体を棺桶に入れた。村の人達も項垂れていた。暫しの沈黙が流れたが、

「魔術師さん、都から四人の男達が見えましたが。」と一人の老婆が言った。案の定、その四人の男達は攝津夜叉丸火長と禰宜良岑火長、天将青龍火長、天将玄武火長だった。

「魔術局の仕事で戦争以外で死者が出るのはそうそうあることじゃない。これから闇の都に帰るが、準備はいいか？」良岑火長は息つく暇もなく言った。どうやら彼らの仕事は僕達を迎えにくることだった。

数日後、闇の都で殉職した三人の葬儀が厳かに行われた。雲月隊正は何も喋らずただ黙々と泣き続けている。厳粛とした雰囲気の中で、告別式や火葬も終わり、皆が解散しようとしていた。終始泣いていた雲月隊正も席を立ち、全員が家路につこうとしたところ、

「君が、黒衣優君だね。」背後から中年の男が僕に話しかけた。

「私は、音羽の父の祇園賢心だ。音羽の弟の泰臥のことで少し話したいことがあるんだ。」と告げた。

第十六話「祇園泰臥」

闇都国立医術院。世界でも最先端の医療を受けることが出来る医療施設である。その十三階、魔術科の病室の最奥部の1399号室に祇園泰臥の病室はあった。闇都国立医術院総力を挙げてても治療法が分からない呪詛のために泰臥は苦しんでいた。

「なぜ、僕を呼んだのですか？」僕は賢心氏に訊いた。

「かねてから音羽に君の話は聞いていた。君は黒法師家の末裔、しかも当主らしい。君の家に伝わる医療魔術で何か泰臥にできることはないかね。勿論、一族の極秘事項というのなら決して無理にやらなくてもいい。」

「救える人がいるのにそれを放っておくようなことの方が我々一族の恥です。使つてこそその医療魔術なのですから、僕に出来ることがあれば何でもします。」言い終わるか言い終わらない内に賢心氏は歓喜に溢れていた。

泰臥の症状は、呪詛による肉体的障害だ。しかもかなり重症の。

「あくまでも成功するかどうかは分かりませんが、早速治療に取り掛かりたいと思います。」僕は賢心氏に言つと、医術院の医師とともに治療室に入った。

治療開始三時間が経過したところ、治療が山場を迎えた。下準備が整い、呪詛解除を行う段階だ。

「魔巫呪詛解除。」泰臥は何も反応しない。賢心氏が入ってきて、「どうでしたか？成功しましたか？」と僕に尋ねた。

「今の段階では分かりませんが、少なからず症状は軽減したと思います。意識の回復は数日以内に必ずすると思います。」

「ありがとう。大変だったろう。何も報酬を与えられなくてすまなかつた。」

その頃、魔国黒法師領では黒衣聖による抜本的な内政改革が行われていた。聖は、僕の留守の間当主の代理をしてくれている。僕からの伝言を受け取った聖は、

「音羽隊正に、神功旅帥、そして仙静旅帥が殉職したのか。」感慨に耽っていると、

「聖様、東部の警護の件でございますが。」

「飛梅と太宰か。どうした。」

「天神山で国境警備をしておりますと、昨今六道家と神奈備家の方から使者が参りまして、黒法師家の者に面会したいと申しております。お会いになりますか？」

「六道家と神奈備家から使者か。連れてきてくれないか？」そう言うのと、控えの間から三人の男女が出てきた。

「私は、六道家に仕えております畝傍と申します。」

「私は、神奈備家に仕えております高円たかまどでございます。」

「それがしは、使者の護衛を仕りました手向であります。」と、三人が三者三様の挨拶をした。

「何の用件でここまで来られた？」聖が尋ねた。

「実は、六道家・神奈備家共に黒法師家に敵意はございません故に、御三家間の国交を諂りに我々は参りました。」

「二千年以上も国交がなかったのです。今更国交を結ばなくて困るようなことはございません。」黒法師家の関白黒衣荊園くろいけいえんが聖に耳打ちした。荊園は、黒衣姓を名乗っていて先祖は黒法師家の人間なのだが当主がまだ子供ということにつけこんで権力を握っている。聖も僕と同様、荊園を嫌っていたので、

「このようなことは当主に報告しなければならないのではないのか、荊園。」と、四十以上年の離れた荊園を叱った。

「長旅の中申し訳ないが、当主のご意見を聞くまでは返答できません。しばらくは、黒法師領内に留まって下さらないか。」と、その日は客を返した。

第十七話「黒衣荊園」

聖は比較的六道家や神奈備家に対して懐柔政策をとろうとしているが、荊園はそうではなかった。荊園は徹底的な御三家対立論者であり、聖に対してあまり好印象を持っていなかった。

「聖殿。」

「なんだ、荊園。」

「六道家や神奈備家が裏切る可能性というのも充分に考えられるのでございますよ。そこら辺のご事情は察しておられるのですか？」
「わかつている。そのことについては優に書簡を送った。数日以内に返事が返ってくるだろう。」

「しかし、優様もまだご幼少でございます故に過ちを侵さないとは限りません。」

「そんなことは今心配してもどうしようもできない。」

「そうでございますか。」荊園は、心中で激昂していた。

（小癪な餓鬼どもめ・・・）と怒っていると、荊園は使者を暗殺する計画を思いついた。

（使者を殺してその責任を聖殿に擦り付ければ、聖殿は当主や六道家・神奈備家から除者にされ失墜するだろう。）と考えたのである。早速部下の兵を集めて、

「六道家と神奈備家の使者を屠ったものには褒美を進ぜる。」と言つて、部下たちの士気を高めた。しかし、普段から暴君であつた荊園のことだ。部下は心から服しておらず、一人の兵が聖に密告した。
「荊園がそのようなことを・・・。今すぐ荊園を城に呼んでくれな
いか。」

「畏まりました。」

兵はすぐさま荊園のもとに行き、

「荊園様。聖様が至急登城せよとの思召しでございます。」

「そうか。」荊園はその兵の前ではそう振舞ったが

（感付かれたか。）と腸を煮え繰り返していた。

僕はそんなこととはつゆ知らず、黒法師領に帰って来た。僕は、聖に、

「六道家と神奈備家の使者が見えたのか。」

「ああ。あとそれと、荊園が使者を殺そうとしている。」

「そうか。僕が止めに言ってくる。流石に当主には反抗出来ないだろう。」

「気をつけるよ。」聖はそう言い残すと、自分の部屋に戻っていった。僕は父の死以降の荊園の暴政は目に余るものがあると前々から思っていた。何とかして、荊園の勢力を封じなければならない。そんなことを考えていると、荊園の方から、

「これはこれは、優様。お帰りに為られましたか。」僕は、精一杯の形相で、

「お、おい。荊園。お前が六道家と神奈備家の使者を屠ろうという計画を立てているのは知っているのだぞ。いい加減にしろ。」

「聞こえが悪いですな、優様。使者を屠る計画は立てておりますが、その使者は国交を結ぶなどと言って、黒法師家の滅亡を望んでいる不届きな輩です。始末するのになんの躊躇がありませんか。」

「それは、本当か？」僕は端から荊園の言を信用するつもりはないが、一応訊いてみた。

「左様でございます。」これでは、埒が明かないと思い、僕は、

「嘘も大概にしろ。僕は数週間前に六道領に行つて来たばかりで、そこで六道家の当主に会っているのだぞ。そして、六道家の当主は黒法師家と友好関係を結ぼうという意思をはっきりと僕に示した。」

「それは、六道家の当主が優様を欺いたのです。」

「それが嘘だとしても、僅か三週間でそんな使者を遣わすか？そうするということは、敵意がないときかそれとも六道家が考えなしの悪人ということだ。敵意がない人間を殺せば、こちら側が悪人の汚名を着せられるし、もし敵意があってもその程度の悪人ならすぐにも滅ぼせるだろう。」僕は、言いたいことを思い切り荊園に言っ

てやった。

「そうでございますか。しかし、時既に遅しでございます。もう兵を向かわせました。」これには僕も驚いた。僕は急いで使者が泊まっている宿に向かった。

宿に着いた僕は、宿の周囲を兵が取り巻いているのを目にした。

「これは、どういうことだ。」

「荊園様のご命令で六道家と神奈備家の使者を殺せと。」

「では、今度は黒法師家当主からの命令だ。全軍を撤退させろ。」

「ですが、荊園様が。」

「荊園には既に話してある。だから撤退してくれ。」僕がそういうと、三々五々と兵達は帰っていった。宿の中にはいると、

「優殿か。ご無沙汰しておりました。」と、手向さんに出迎えてくれた。

「手向さん、この度はうちの兵がご迷惑をお掛けした。」と詫びてその場を去ろうとした時、

「お待ちください。畝傍様も参られております。」

「畝傍さんか。挨拶だけしておくか。」手向さんに案内されて入った部屋には、畝傍さんともう一人女性が座っていた。

「わざわざこつちまで出向いてくれたんですか。明日登城するつもりでしたのに。」

「で、こちらの方は。」

「魔国府で参議を務めております高円と申します。」

「魔国府？」

「六道家と神奈備家はすでに手を組んでおりまして、それぞれの機関も統合され魔国府という機関になっております。」

「そうだったのか。黒法師家もすぐに国交を結ぶつもりだ。」

「そうですね。では、その旨を伝えて本国に帰りたいと思います。」そう言つて、宿を出た僕の前に荊園が立っていた。

「優様、六道家と神奈備家と国交を結んだらしいですね。何をバカなことを。」

「何か問題でもあるのか？」

「ですからあの使者は全て・・・」

「分かったからもう帰れ。お前の話は聞き飽きた。」荊園は何も言
い返す言葉がなく去っていった。城に帰った僕は、

「聖も魔術局に戻りたいだろ。だが、荊園にはこの国を任せること
はできないな。」

「荊園に国を任せるくらいなら、僕はここに残る。」

「悪いな。」

「黒法師家の為だ。」

「もし嫌なら僕が残るが。」

「別にそこまでしなくても。」

「でも、御饌津山を越えたらすぐ闇の都だから、此处からでも通え
るんじゃない？」

「そうだな。そうするか。」という事で、僕と聖の黒法師領と闇
の国を行き来する生活が始まった。

第十八話「闇と水」

それから数週間後、魔界暦で新年を迎えた。去年は、魔術局に入ったり六道領に足を踏み入れたりと色々なことがあった。魔術局は最低人員を残して隊員は皆休暇をとっている。しかし、僕達魔術師部隊南閻都隊は運悪く新年早々仕事をしなければならなかった。新しく南閻都隊の隊長になった雲月隊正は未だに元氣を取り戻していない。そんな折、雲月隊正が隊員に向かって、

「私は魔術局の仕事を暫く辞めて旅に出ることにしたから。誰か、隊長の仕事任せたわよ。」と、言い残したきり次の日から職場になかった。とりあえず、南閻都隊では新隊長を決める事にした。

「やっぱりこの中で一番位階の高い火長陣の中から誰かってことになりますよね。」僕はなぜかこの会議の進行役を任されている。

「その事なんだが、天将兄弟の残りの二人が南閻都隊に来ることになった。残りの二人も玄武や青龍と同じく火長だ。もう少しで来るからあいつらの言うことも参考にしたらどうだ？」良岑火長が言った。

「玄武火長に青龍火長。残りの兄弟ってどんな人ですか？」聖が僕が聞きたかったことを先に聞いた。

「俺達は四つ子なんだ。だから簡単に言えば俺達みたいな奴がもう二人増えるってこと。」などと話していると、

「遅くなったわね。」と、容姿が似ている気の強そうな女性が二人部屋に入ってきた。

「今日から南閻都隊に派遣されることになった天将朱雀です。」

「同じく天将白虎です。」僕と聖と亜弥子以外は顔見知りらしく、夜叉丸隊正が

「この三人が左から黒衣優君と黒衣聖君と葉竹亜弥子ちゃんだ。」と、三人まとめて紹介した。

「で、新しい隊長を決めてるんでしょ。うちらやあんた達じゃそん

な大役無理やろうから、その亜弥子ちゃんにさせたら？」朱雀火長が言った。

「そんなすぐに決めちゃっていいんですか？」僕が一応聞いてみた。「大丈夫や。いざとなったらうちらが助けてやればいい。」誰も反論しなかった。

「そういうことや。じゃあ、亜弥子ちゃんよろしく。」朱雀火長の鶴の一声で南閭都隊隊長には亜弥子が就任することになった。

一方、水の王城の玉座の間では。

「七王の内の六家、そしてその諸侯たちよ。よくぞ集まった。この前は閭の国との戦争をやむなく中断せざるを得なかったが、次そこは確りと勝たなければならぬ。そこで、余はここで六国の王と諸侯を集めて、ここに六国同盟を結びたいと思う。」水王ラティウス・ウォルズが言った。王や諸侯、そして彼自身の部下から拍手が湧き上がった。

「その為にだ。誰か閭の都へ間諜に行つて、序に閭王を暗殺する者はおらぬか。」流石にこの任務には誰もやろうという者はいなかった。

「そうか。では別の作戦を……」

「待つてください。」その声は意外にもラティウスのすぐ横から聞こえた。

「なんだ、ユーロ。」ユーロと呼ばれた少年は、

「閭王を暗殺できるか否かは分かりませんが、間諜としての役目は全うする自身がございます。」彼は、堂々と諸侯たちの前で言った。

「お気持ちは存じ上げております。しかし、貴方様は水王家の皇太子。そのように自重なさらないようでは我々家臣が困ります。」家臣の一人が言った。

「次の王なら叔父のプトレマイオス親王がいます。そんな心配は無用です。」しかし、ユーロの意見に反対する家臣は一人だけではない、

「そうでございます。ユーロ様。貴方様こそが正統な水王家の末裔。貴方様にはこの国の将来がかかっているのですでございますよ。」

「それは、僕が死ぬことを恐れているのであろう。では、生きて帰ったらどうなる？ 闇の国の内情を直に見た王なんてそうはいないでしょう。そうなれば、僕は新しい視点でこの国の政を行える。」その場にいた他の王や諸侯は（大した御子息だ。）と、感心していた。

「そこまでいうのなら、あとは陛下の御意次第。」

「どうなさりますか、陛下。」

「ユーロは余の大切な一人息子。そう軽々しく他国に送りたくはない。しかし、余もユーロの気持ちには応えたい。故に、ユーロが闇の国に行く事を許可する。」

「父さん、ありがとう。」ユーロは喜んで早速闇の国に行く準備を始めた。

第十九話「六国使節」

水の都で、水・光・獣・火・風・音の六国が同盟を結んだことは、あくまで内密にしておいてあった。しかし実際に闇の国に自らの嫡子を送るには完全秘密というわけにはいかないのだった。そのことで、水王ラティウス・ウォルズは悩んでいた。

「どうすればいいのだ？」彼は側近の七宝翡翠しっぽうひすいに意見を求めた。七宝翡翠は、魔界でも由緒ある名家であり、彼はその中でも最も優秀な人材として、水の国の大臣にまでなっている。

「ユーロ殿下に幾人かの従者をつけて、あくまでも和平使節として送り込んでみてはどうでしょう。」

「従者に良い心当たりはないか？」

「これは、親馬鹿かもしれませぬが、私の息子の剣きなどをお用いなさっては？」

「よからう。あとは、余自身が優秀な人材を探す。仕事に戻ってよいぞ。」ラティウスは一先ず一人は見つけたが、彼は少なくともユーロを含め七人以上は必要だろうと考えていた。

翌日、ラティウスは六国の他の王に対して、

「誰か、余の息子のユーロの従者に相応しい人材をご存じないか？」と尋ねたところ、光王サンドラ・ライトが、

「光軍では火長だが、その高い魔術力には評価がある天魔雷てんまらいという者がいる。もしよかつたら、彼を使われよ。彼は、我輩の警備の為に水都に來ている。ご要望とあらば今すぐお呼びいたすが、いかがされましよう？」ラティウスは幸先よく二人目が見つかったことが満足だったのか、自分の足で、彼を迎えに行った。

光王が宿泊している宿では、天魔雷だけでなく七宝剣もいた。

「二人ともここにおったのか。そちたちには、余の息子ユーロと共に、闇都へ行く仕事を与えたいのだが。」

「話は、父から聞いております。僕にも心当たりがありますので、

「ご安心ください。」剣がそう言うと、

「では、そちに任せる。」と言って、ラティウスは帰って行った。

「杜^{もろ}埜^の幽^{ゆう}羅^らは確定だな。」雷^{らい}が剣に確認した。

「あの天才魔術師のか。？ 娥^{こう}風^{ふう}伯^{はく}と火龍^{かり}焰^{ゆう}摩^{えん}はどうだ？」

「誰だ、そいつら？」

「魔術研究者だ。俺達と年はさほど変わらないが、魔術の腕前はやばいほど強い。」

「そつえば、八幡^{はちまん}浄^{じょう}階^{かい}という奴が、音王に従軍して来ているが、そいつがなかなか面白い奴なんだ。」

「あとは、黒咲鴉^{くさく}だろ。あいつは、何が起きてもパニックにならないから、ああいうのが一人いてくれると助かるだろう。」

「それに忘れちゃいけないのが、黒衣の兄弟だろ。」

「でも、あいつらどこにいますんだ？」

「さあ。この前、水都で餓王廼刹とかいうやつが、暴れまわった事件があつたじゃん。あの時、闇からの援護部隊の中にいたって噂もあるけど。」

「それ本当か？」

「まあ、そんなことは闇都にいたら分かることだろう。」

「あいつらがいないのは少し残念だな。」

「もし、あいつが闇の魔術局にいて、僕たちと敵対することになったら？」

「それは、面倒だな。何せあいつらは黒法師家の魔術を駆使するから、僕らとは相性悪いじゃん。」

「そつえば、優と聖って一緒にいたところ見たことないけど。」

「そりゃそつだろ。あいつらは双子だから、後継者争いを防ぐために敢て離しておくんじゃないの？」

「あいつらは、二人揃われると、厄介な事極まりないだろうが、一人なら大丈夫だろう。」

「じゃあ、二人とも闇の魔術局にいたら？」

「そのときは、死を覚悟しよう。」剣は笑いながら言った。

「そんなことないよな。」

「もし、そんなことがあったら、僕らは命乞いをするしかないよな。」
「そんなことが本当に起こるなんていうことを彼らは考えても見なかった。しばらく、話しているうちに、杜埜幽羅と火龍焰摩、？娥風伯、八幡浄階、黒咲鴉、そしてユーロ・ウォルズがやってきた。」
「結構早かったんだな。」

「急がされたんだ。急を要することになった。」幽羅が言った。

「で、この人が水の皇太子ユーロ・ウォルズ様だ。」焰摩がそう紹介した。

「できれば、無礼講でお願いしたい。堅苦しいのは王宮の中だけで充分だ。」ユーロは呆れながら言った。

「で、なぜ急を要するんだ？」

「敵の面子に問題がある。」幽羅は少し落ち込んでいた。

「黒衣兄弟が二人とも闇の国の魔術局にいる。」焰摩のその一言で、剣と雷は閉口してしまった。

第二十話「再会と疑念」

昨今の戦争で闇の国の受けた被害は大きい。南闇都隊も例外ではなく、戦後処理に明け暮れていた。そんな中、闇の国に六国の使者がやってきた。今日の闇の都は大雪で交通機関もストップしており、使者を迎える部隊が魔術局本部に来れなかったらしく、南闇都隊が代わりに使者の接待を引き受けることになった。

震える寒さの中、僕と亜弥子は使者の為に魔術局の掃除をしていた。

「葉竹火長。」僕が、亜弥子に囁いた。

「私が少し火長に昇進したからって、何でそんなに恭しくしてるわけ？」

「冗談だよ。それより、使者っていつ来るの？」

「分からない。」

「なんで知らないの？」

「突然の事で聞いてない。」

「そうなのか。」なんて喋りながら作業を進めるうちに、

「おい、二人とも。六国の使者が来たぞ！」と、玄武火長に呼ばれた。僕も使者には興味がある。一目見ようと思い、急いで出迎えようとしたら、聖が僕の目の前に立ち塞がった。

「どうしたんだ。どいてくれ。」

「驚くなよ。優。お前ならこの使者は絶対に知っている筈だ。」聖は興奮しながら言った。

「誰だよ。僕の知っている人って？」

「俺達だ。」目の前には、僕の知り合いの七宝剣が立っていた。剣を含めて、この使者の面々は皆知り合いだ。聖も彼らのことを知っていたのは少し意外だったが。

「久しぶりだな。」僕が剣たちに声をかけた。

「ねえ、優。」亜弥子が僕に尋ねた。

「何？」

「この人達とどこで知り合ったの？」

「剣と浄階は黒法師家の分家の末裔だから、僕の親戚。雷と風伯と鴉は黒法師家に代々仕えている家の人。幽羅と焰摩は一時期僕と一緒に色々な新しい魔術を開発したり、黒法師家に伝わる魔術の研究をしてた。」

「そんな接点があったなんて、初耳。」亜弥子はすこし感心した様子で聞いていた。

「で、その人は？」聖が一番奥に立っている金髪の僕と同じくらいの年の美少年を指差した。

「この方はな。水の国の皇太子のユーロ・ウォルズ様だ。」幽羅が少し自慢げに話した。

「皇太子まで連れてきたのか？」

「連れてきたっていうか、本人の希望だけど。」

「よく、ラティウス王が許してくれたな。」

「あれ。聖ってラティウス様を知ってたの？」

「お前らもご存知の通り僕は水の都に住んでたからな。それに、会ったこともある。」

「そうだったのか。」

「そういえば、さっきから一緒にいるこの子は？」焰摩が僕に聞いた。

「この方はな。六道家宗家の葉竹亜弥子様だ。」僕は幽羅と同じように少し自慢げに焰摩に言っただけだ。焰摩は笑いながら、

「六道家の人間も闇の魔術局にいるのか。まさか神奈備家の奴もいるんじゃないだろうな。」

「さすがにそれはいいない。」

「あ、少し意外。」僕は焰摩と暫く雑談を愉しんだ。

「そういえば鴉は？」風伯がふと言った。そういえば、先ほどまでいた鴉がいない。元々物静かな奴だから気付かなかったけど。

「どこ行っただ、あいつ？」僕達は一日中探したが、その日は帰

ってこなかった。

鴉が消えてから数日後。なんと、何事もなかったかのように鴉が帰ってきた。

「今迄どこ行ってたんだ？」

「熱が出て一人で休んでいた。」しかし鴉は完全に治っていたようだ。

「マジかよ。俺達真剣に探したんだぞ。」焰摩が言った。

「おい、大変なことになったぞ。」夜叉丸火長と良岑火長が南閭都隊の部屋に駆け込んできた。

「どうしたんですか？」

「餓王廼刹が脱獄した。外部からの誰かの手を借りて。」暫くは誰も、何も喋らなかった。廼刹との血戦は記憶に新しいので皆が鮮明にその時のことを覚えているからである。そして、視線が鴉の方に集まった。

「お前、まさか。」

「違う。僕はやっていない……」鴉は弱々しく言った。

「しかし、この状況は怪しいな。」良岑火長が追い詰める。

「絶対にしてない……」鴉の顔は恐怖で崩れていた。

「本当にしてないのか。」

「……」あまりのことに、鴉は失神してしまった。

「使者が早速裏切るとは。六国の王達は一体何を考えているんだ？」良岑火長は怒っていた。

「それより、鴉を連れていくか。」僕は、一瞬信じられなかった。

鴉とは昔からの知り合いだ。だから、鴉がそういう奴じゃないと信じたかった。そんなようなことをするように感じさせる一面は持ち合わせていなかった筈だ。僕を始め、聖や剣、雷、幽羅、焰摩、風伯、浄階全員が啞然としていた。

「確かに、普段からあんまり喋らない奴だったし、いまいち本心は分からなかったけど、悪い奴じゃないよな。」浄階がそう口にした。

「六国の王は何もそんな指示を出していないのか？」

「そんな指示は出していない。しかし、」

「しかし？」

「誰にも言つなよ。うちの極秘情報だから。」

「何だよ？」

「ラティウス様直々に、闇王を暗殺せよとのご命令が出されている。遂行するかどうかは僕達に任せるらしい。」

「やっぱり、ただじゃ和平使節なんて出さないよな。変だと思った。」

「で、鴉のことだけどどうする？」

「まあ、やってないんだし最悪証拠不十分程度で釈放されるのがオチじゃないの？」僕達はこの時は少し樂觀視しすぎたようだ。

第二十一話「獄門の鴉」

六国からの和平使節が、闇の国に来て早速凶悪犯の逃亡に手を貸した疑いで捕まった事件の噂はその日の内に闇の魔術局中に広まった。今回は、頼りに出来そうな良岑火長たちも鴉のことを疑っている。僕と聖と使者の残りの七人で解決するしかないようだ。

「六国の使者っていう大義名分の下でこんなに堂々とそんなことをするとはね。」朱雀火長も鴉のことを疑っているようだ。

「あなたたちの気持ちも分からないではないわよ。友達がこういうことになったら、私だって信じたくないから。」

「絶対にしてないはずですよ。」浄階が必死に反論した。

「でも、アリバイとかなないわけでしょ。たとえ冤罪だったとしてもどう説明するわけ？」

「説明つてまさか・・・」最悪の予感的中したようだ。

「立場的にも疑わしいから、間違いなく法廷で裁かれることになると思うわよ。」

「何とかならないんですか？」

「さあ。私は鴉って子のことを知らないから。でも、あなたたちも友達なら窮地に陥っている所を助けてあげるべきなんじゃない。功を奏すかどうかは別として。」朱雀火長は僕達に助言しつつも、心の底ではまだ鴉のことを信用出来ないらしい。

「亜弥子。」僕は亜弥子に話しかけた。

「鴉さんの潔白を証明するのを手伝って、でしょ。」

「そつだ、分かったのか。」

「当たり前でしょ。協力してあげないこともないけど。」

「ありがとう亜弥子。で、どうすればいいと思う？」

「まず細かい事情を私達の方から鴉さんに聞いたほうがいいんじゃないの？」

「でも、鴉は留置場の中に・・・」

「男なら勇氣出して入んなさい！」

「は、はい。」こういう所は亜弥子の方がずっと勇敢だ。尊敬に値すると思う。男としてか弱い要素がないのは残念だが。

「大丈夫なの？留置場なんか忍び込んで。」

「大丈夫よ。そりゃ外に逃げる人に対する警備は厳しいかもしれないけど、中に自ら潜入するなんてまず考えないでしょ。」

亜弥子に連れられて、僕たち一行は留置場の前まで行った。

「一応、入っていいか確認したら？いいんなら別にこっそり忍び込む必要なんてないんだし。」

「じゃあ、聞いてこよ。」

「すいません。黒咲鴉に面会したいのですが。」

「魔術局か都警局か軍部の方以外の面会はお断りしております。」

「私達は、魔術局隊員よ。ほら。」亜弥子が身分証明書を見せた。

「では、私の方から案内させていただきます。」亜弥子がそつと僕に目配せした。僕も大体のことは察しががついている。いくら魔術局の隊員といえども、捜査上無関係の人間の入場許可なんてまずありえないだろう。それなのに、こつとも簡単に入れようとは。この受付の係員こそ怪しいだろ。まず、受付を開けている時点で問題なのに「すいません。」僕は少し語気を強めて言った。

「なんでしよう？」受付の男は無愛想に言った。

「なんで、入場許可おろしたんですか？僕達は無関係なのに。」

「気付いていたか。」男の声が聞き覚えのある声になった。

「君達の鴉君に対する信頼は、良岑から聞いた。私からも協力する。

「ここで、賢心氏に会うとは思ってもみなかった。

「じゃあ、良岑火長も・・・」

「ああ。本心では君達の事を信用している。あれは、職務上の芝居だろう。安心しなさい。これは、責任をとりたくない上官たちがやったことだ。鴉君は何もやっていない。」

「でも、相手が上官ならどうすればいいんですか？」

「打開策はある。このことは、まだ社会には公表していないから、上官を買収すればいくらでも事実を変えることが出来る。例えば、単独での犯行でした、とかにね。」流石賢心氏だ。ベテランだけあって、こんな時も冷静に対応している。

「では、私はここで一旦職務に戻るよ。君達の健闘を祈る。」そう言い残して、賢心氏は去っていった。

「運が良かったな、優。すんなりここに入れて。」聖が耳打ちする。「ここだな。鴉の部屋は。」剣が部屋の扉を指差す。

コンコン、とノックをすると、すぐにノックが返ってきた。

「どちら様ですか？」紛れもなく鴉の声だ。

「俺達だ。」

「来てくれたのか。」

「勿論だ。」

「なんで、こんなことに巻き込まれたかは今さっき聞いた。」

「どうしてなんだ？」

「餓王廼剝の脱獄事件に関係していることは知ってるだろ。実は、外部から手を貸した者が捕まっていないから、一番怪しい立場の鴉をとりあえず逮捕して上官が面目を保ったわけだ。」

「それは闇の魔術局ではよくあることなのか？」

「わからない。でも、賢心氏は安心しろって言っていた。」

「なんで、安心しろって言えんの？」

「賄賂さえ払えばいいらしい。一応賢心氏も祇園一族の人間だから、金銭面には余裕があるだろう。」

「そんなことしたら悪いよ。仮にも、優は知ってても俺にとつては赤の他人だよ。そんな人の為にお金を使わせるなんて。」

「大丈夫だ。そこら辺は賢心氏とも相談しておく。」

「わかった。看守が来ないうちに早く帰った方がいい。じゃあな。」

「それじゃ。」

「うまくいったか？」急に背後から声をかけられる。看守かと思い、振り向いたら、

「私だよ。驚かしてしまったようだな。」後ろにいたのは賢心氏だった。

「で、彼はなんと？」

「事实は伝えたんですが、どうも赤の他人にお金を借りるのは気が引けるそうです。」

「そうか。おい、鴉君。」賢心氏は扉越しに再び鴉を呼んだ。

「なんですか？」

「私が祇園賢心だ。」

「本当に賄賂を払ってくれるんですか？」

「当然だ。自慢じゃないが私も一応それなりの財産はある。君の為に少し切り崩すぐらいなんの躊躇いもないよ。それに、君は私にとって他人ではない。優の友達というだけで、私には充分知人であると言えるよ。」これで、全てがうまくいったと思った。しかし、世の中はそう甘いことばかりではないのである。

第二十二話「二つの点は一つの線に」

約束通り、賢心氏は上官に交渉した。

「何とか黒咲鴉を解放できないのでしょうか。大体証拠不十分なのですし。」

「そういうわけにはいかないのだよ。」

「では、これを。」賢心氏は懷から小切手を上官に手渡した。

「今回は金では動けない。知つての通り、餓王廼刹を脱獄させたのは魔術局の責任だ。で、私は魔術局の長官だ。当然、世間からは批判を浴びるだろう。」

「それで、無実の人間を？」

「ならば、真犯人を見つけ出してこい。南閻都隊の連中は勝手に使つてもよいから。」

「それまでは、黒咲鴉の解放はないと？」

「あたりまえだ。それと、くれぐれも隠密に行え。」

「は。」賢心氏はこれ以上は無駄と悟り、南閻都隊の隊室に行った。残念ながら、すぐの解放は無理らしい。」

「そうでしたか。」聖は肩を落とした。

「交換条件として、真犯人を捕まえてくれれば手を打とうとは言つていた。」

「それが、閻魔術局長官ともあろう人間がすることかよ！」剣が激昂して言った。

「ああ。それが、閻魔術局の問題点であるといえよう。私からも協力する。君達の手で真犯人を捕まえて来るのだよ。」と、賢心氏が述べた。

「でも、どうやって当てもなく真犯人を見つけ出すことが出来るんだよ？」現実的に考えれば最もである。まるで雲を掴むような捜査だ。何をすればいいかすらも思いつかない。

一月が終わり、二月がやってきた。その後、依然と捜査は難航していて、何の手がかりもないまま捜査開始一ヶ月が経とうとしていた。そんなある日、思わぬ来客が南閭都隊の隊室を訪れた。

「捜査は順調に進んでいるか？」

「完全に暗礁に乗り上げています。」

「こんな大変な時期にこういうのも何だが、うちの息子の泰臥の病が完治したそうで、四月からこの部隊に入るようになったんだ。足を引く張ることも多いと思うが、私からも宜しく頼んだ。」

「実は、僕達からも言うことがあるんです。」不意に、幽羅が言った。

「僕達はあくまで六国の使者として来ているわけですから、明後日にも帰らなければなりません。」

「そうか。大変だな。何の別れの宴もできないが、元気だな。」幽羅達六国の使者が明後日にも帰らなければならないなんて、僕には初耳だった。どうやら、他の聖や亜弥子たちも同じ態度だった。

「鴉はどうするんだ？」

「そのことに関してなんだが、僕達で相談した結果、一旦は水の都に帰るが、捜査に進展があつたのなら、いつでも呼んでくれ。」こうして、六国の使者達は闇の都を去って行った。

皮肉にも、捜査の手がかりとなるようなことが彼らが去つた数日後に見つかった。どうやら、餓王廼刹は翳鬼と親交があつたことが判明した。当然、この結果には南閭都隊一同が啞然とさせられた。

「翳鬼と繋がっていたのか。これじゃあ、犯人の目星はついても捕まえるのは困難極まりないだろうな。」良岑火長は、音羽隊正たちの死のことを思い出しながら呟いた。

「音羽ですら全く及ばなかった奴だ。俺達に出来ることって何かあるのか？」夜叉丸火長も困り果てていた。

「長期戦に纏れてもいいから、鴉を救出するべきなんじゃないですか？」亜弥子が僕達に助言をする。

「長期間に渡って、捜査をしても結局はいつかは翳鬼と戦うことになるんだぞ。」と、夜叉丸火長。

「では、いつそのこと餓王廼刹を狙いましょうか？」これは、発想の逆転だ。餓王廼刹が翳鬼に匿われているのなら、まず翳鬼を狙わなければならないというのが通常の考えだが、本来の狙いは餓王廼刹なので、直接狙ったほうが寧ろ上策なのではないか。

「そうかもしれないな。」僕も亜弥子に賛成した。早速、僕と亜弥子は桃源郷村に出向いた。あれ以降も数回翳鬼の部下達が出没したらしいが、翳鬼自身や廼刹は誰も見ていないという。

「恐らくは、桃源郷村の東の森林地帯に隠れているんだろ。」

「上空から探す？」

「そんなことをして敵に見つかったらどうするつもりだ？」

「我々をお探しのようだな。」フッフ、と微笑を浮かべた男が前から歩み寄ってきた。その男こそが餓王廼刹その人本人であった。

「自分自身から出向いてくるとはなかなかの度胸だな、廼刹。」

「貴様ら如きのガキ二人に何で出るのを惜しまなくちゃならねーんだ？」

「あんたのせいで無実の人間が一人獄中にいんのよ！」亜弥子は無謀にも自分よりも五十センチ程大きい廼刹につかみかかった。無謀なこととは亜弥子も分かっているのだろうが、自分を止められなかったのだらう。

「離せ、クソガキが。」今だ、廼刹の意識が亜弥子に集中している。僕は賺さず、

「雷巫雷砲三煌閃！」三条の光が僕の手から繰り出される。この術は、結構な威力があるので直接食らうと負傷することは粗間違いないだろう。しかし、大男の廼刹にとってはこんな術所詮兎戯に等しく、片手で止められた。

「少しは、出す術を考えるのだな。」廼刹には少し余裕も感じられる。

「優。これを使って！」亜弥子が突然自分の胸元にある魔鉱石の首

飾りを僕に投げ渡した。亜弥子は初めて出会った時から肌身離さずこの首飾りをかけ続けていた。案の定、その首飾りを僕がかけた途端、魔力が体中から湧き上がってきた。

「魔鉱石にこんな力があるとはな。」僕はつい声を出してしまった。「それは、魔鉱石か。」廼刹の目の色が変わった。廼刹はきつとこれを狙っているに違いない。

「雷巫雷砲三煌閃！」もう一度、同じ術を発動した。しかし、さつきとは手ごたえが全然違う。僕の放った光は廼刹に直撃した。と同時に、次の瞬間廼刹は消えていた。

第二十三話「魔鉱石と叛乱」

魔鉱石。六道家の開祖が作成したとされる魔界屈指の魔道具である。しかし、六道家を含む御三家の者以外には操ることが出来ないような構造になっており、他の魔術研究者が研究できないので、魔術研究者の間では未知の領域として誰も研究する者はいない。そして、この魔道具のもう一つの意味。それは、御三家の者が使用可能という点からも分かる通り、その昔御三家の関係は非常に良好だったと思われる。だが、時が経つにつれその関係はますます悪化している。僕は御三家の本来の姿、そして翳鬼を追い払った程の強い魔力を思い浮かべつつこの魔鉱石を亜弥子に返還した。

そして、さらにその流れに拍車をかけようとする事件がおきた。

黒衣荊園が魔国黒法師領で革命を起こしたのである。荊園率いる革命軍は「大黒主義」を掲げて黒法師城から郊外数里の所で挙兵した。大黒主義とは言うまでもなく、黒法師家単独の魔国統一を目指すということであった。勿論、あまりの強固策に反論の意見は止まず黒法師領は二分される形となった。この報せを聞いた僕と聖は急遽黒法師領に向かった。当然、六道家や神奈備家にもこのことは知れ渡った。すぐに各將軍を集めて会議に諮った。

「荊園の勢力は？」僕は聞きたい事がたくさんあったが、とりあえず太宰に聞いてみた。

「恐らく黒法師領内の勢力の七割を占めています。」

「こちら側の方が不利なのか。」

「当主の権限を用いて何か出来るのでは？」賺さず飛梅から助言が入る。

「敵は大黒主義を掲げている。これをも打ち破るほどの強固策は流石にとらないだろう。」と、聖。

「だけど荊園も同族。僕と聖を亡き者にすれば自分が当主になれるだろう。」

「ならば、この戦争は勝つしかないのか。」

「どうやって勝つんだよ？」

「………こんなことをしていいのか分からないが………」

「」

「何？」一同が聖に注目した。

「神奈備家や六道家と協定を結び兵の援助を出してもらうしか……」

「」

「その手があるか。」

「お待ちください。」それまで黙っていた一人の老将軍が口を開いた。

「どうされました、稲荷将軍。」

「昨今の情勢から六道家や神奈備家は黒法師家に対して和解するという方針でここまでできています。ですが、こちらから協定を結ぶための使者を遣わしてすぐに兵を貸せと頼んでも兵を提供してくれるのでしょうか。むしろ、その兵を用いて自分達を攻めて来るという疑いの念すら抱くでしょう。そうなれば、六道家や神奈備家との和解は当面は困難を極めることとなります。」流暢に自論を展開するのは御饌津稲荷。年齢は七十を過ぎていますが、若き頃は当代最強の魔術師であった。今も自らの戦歴を活かして黒法師家参謀として職務を全うしている。正直、五十年以上も軍にいる彼はこのような場では当主よりも頼りにされ権限も強いのである。

「では、どうすれば。」

「優様と聖様には葉竹亜弥子という六道家の知り合いがおりますね。彼女に取り入ってみては以下がでしょうか。」優しい口調で稲荷は言った。

「ではこの中で使者をやってくれる人はいな……」

「そっちから出向かなくてもこっちから出向いてやったわよ。」

城門の所に亜弥子と畝傍さんが立っていた。

第二十四話「連合軍」

畝傍さんは来て早々、

「この期に及んでなぜまだ決断しないのですか？」

と、僕に尋ねた。

「もしここで援護の兵を求めれば、六道家や神奈備家がこの機会に乗じて黒法師家を倒す可能性は充分にありえる。しかもそっちらわざわ出向くとなるとますます怪しいですよね。」

「で、答えはどっち？六道家と神奈備家と和解するかそれとも・・・」

「

畝傍さんの質問は少し意地悪だった。要するに和解しなければ攻めると暗に示しているのだ。六道家が西方の黒法師家に牽制するのは恐らく北方の神奈備家が南方の例のあいつらに攻め入るからだろう。六道家と神奈備家が同盟を結んでいるということは・・・

「まさか六道家で南方に兵を進めるのですか？」

「そこまで読まれたのなら教えてあげましょう。今、六道家は御三家内でも最も力があります。もし北方と西方が安泰なら南方の華爛からんを攻めても大丈夫ということです。」

畝傍さんは、きっぱりと言った。しかし、華爛は魔国の南方にある強国で闇の国や六国などよりも強大な兵力を持っている。

「本気でそんなことを？一体何の為に？」

「大いなる目的の為。細かいことを知りたければ条件を呑んでもらえればいいんです。」

最初は講和条約でも結ぶのかと思っていた。こんな大掛かりな話になるとは・・・

「条件を呑みましょう。」

そういえば、なぜ今迄講和条約を結ばなかったのかが不思議でない。黒法師領は北東に神奈備領、北西に闇の国、東に六道領、西には常荒海と呼ばれる文字通り船を浮かべることすらできないほ

ど荒れた海、そして南には華爛がある。周囲に味方がいない孤軍奮闘の状況を打破するにはこうするしかなかったのだ。

「そういうと思って。」

それまで黙っていた亜弥子が、

「窓の外見てみて。」

と、言って窓の外を指差した。そこには、六道家と神奈備家の連合軍約三千名が隊列を組んでいた。

「黒法師家が条件を呑むことは想定内だったから予め兵を連れてきておいた。」

六道神奈備連合軍は黒法師家の兵よりも装備は旧式だが（聖が軍の改革を行い軍の装備だけは最新鋭のものにした）頗る士気は黒法師家の比べ物にもならなかった。

「これで出陣の準備は出来たわね。」

亜弥子は少し笑みを浮かべていた。

一方、闇の都では。

事を六国の王に報告したユー口達一行が闇の都に帰ってきた。彼らは南閻都隊の隊室を訪ねたが、案の定僕や亜弥子はいなかった。

「君達もタイミングが悪いな。どうやら、魔国で一戦あるらしいから優達はいないよ。」

「そんなことより朗報です。」

剣が待ち侘びれないように言った。

「水王が闇王に直談判した結果、鴉が釈放されるそうです。」

「それはよかった。」

「で、鴉を迎えに来たんですけど。」

「つかぬことを聞くけど、君達まさか魔国に？」

「はい。それがどうかしましたか？」

「別にいいんだが、聖からの連絡によると魔国で起きている争いは黒法師家内での内乱を発端にした大分複雑な構図の戦争だ。詳細は知らないが変なことには巻き込まれるなよ。」

「わかりましたよ。大丈夫ですよ。」

「それより、優と亜弥子が廼刹を発見したようだ。」

「本当ですか？」

「しかし、翳鬼と接触している可能性が非常に高い。」

「翳鬼ですか。」

「水の国でも一時期大変な騒ぎになった奴だ。優達が生き延びたのはある意味奇跡だよ。」

「ということで、ユーロ達一行も魔国に足を踏み入れることになった。これから起こる災難に気付かずに。」

第二十五話「荊園、廼刹、翳鬼、そして華爛」

ユーロたちが黒法師領に到着したので、早速荊園を倒すための作戦を話し合った。

「六道家や神奈備家がついているのだから正攻法でいい。」

と主張する聖や神奈備桃子、

「荊園はこれまで黒法師家を牛耳っていた奴だからこの地で戦うにはまず相手を崩すことから。」

と主張する葉竹姉妹と、

「荊園の勢力を魔国の中で孤立させて自滅を待つ。」

と主帳するユーロや剣などの六国の面々。当然のことながら議論は難航した。最終決定は黒法師家当主である僕がすることになりそうなのだが、どの案も一長一短ありなかなか決められない。

そして、数日が経ち、事態は思いも寄らない方向へと進んだ。作戦をなかなか決められずに迷っていた矢先、手向が黒法師城にやってきて、

「華爛の動向がおかしいのです。」

と告げた。それまでは自分達が有利な形勢だったが、荊園と華爛に挟まれては迂闊に行動できなくなってしまう。僕は、咄嗟に、

「荊園を倒してから華爛の方を何とかする。」

と言った。当然、華爛の方が勢力は強いしすぐに魔国を攻めれる準備が出来ているのでまずは華爛から対策を打つべきだ、と雷や浄階から諫められた。

「なんで荊園からなんだ？」

「荊園は完全に倒すことが出来るかもしれないが、華爛を完全に倒すことはほぼ不可能だ。もし荊園を倒したら、残りの敵は華爛だけになる。」

「じゃあ、お前を信じるよ。そのかわり絶対成功しろよ。」

さらに数日後、僕は指令を出した。

？聖と桃子は直接荊園の本拠地へ

？ユー口と剣と雷は御饌津山から荊園領へ

？幽羅と焰摩は黒法師城の周辺の防御

？風伯と浄階と鴉は六道領から華爛へ

？青龍火長と白虎火長は念のため翳鬼と廼刹が潜む神奈備領東北部の防御へ

？玄武火長と朱雀火長は六道領の防御

？畝傍さんと高円さんと手向さんは魔国府の統率

？飛梅と太宰は天神山の防御

？夜叉丸火長と良岑火長は僕と共に魔国・荊園領・華爛の三国の国境地帯へ

？珊瑚さんと亜弥子は南路を通って華爛へ

そして、僕が？班と一緒に三国の国境地帯で指揮を執る。これまでも水都事件や翳鬼事件、鴉逮捕事件など様々なトラブルに巻き込まれてきたが、今回が多分一番緊張するだろう。

「では、みなさん。それぞれの持ち場へついてください。」

この一言はもう後には戻れないということを意味するのだ。僕はこの一言を言うのにどれだけ勇気を振り絞ったのか自分でも分からなかった。

第二十六話「御三家抗争縮図」

まず？班の様子から窺うことにしよう。

聖と桃子の関係はともじやないが良好とは言えない。

「同じ班っていうのはくじ運が悪すぎるだろ。」

「それはこっちのせりふよ。なんで私があんたと組まなくちゃいけないの？」

「仕方ないだろ。僕だつて嫌だよ。」

このように、お互いに罵詈雑言が飛び交うこと数時間。二人は荊園領との境まで来てしまった。

「どうすんの？」

「あんたも少しは考えなさいよ。」

ここ数ヶ月の出来事のせい、元々四方が黒法師領のこの地には関所のようなものがなく、往来は自由といつてよかった。

「そつえば荊園つて何者？」

桃子が不意に聖に尋ねた。

「黒衣荊園つてのは、僕と優にとつては大叔父にあたる人間だ。普通の親戚ならそれでいいんだが、如何せん独占欲や物欲が強くて黒法師領の税率は上げるわ自分の側近を重用して齒向かう者には制裁を加えるわで大変だったんだ。そして、とうとう独立するとか言い出して。」

「でも、荊園もそれまでは黒法師家に対して尽くしてきたじゃない。それがいきなりまだ私達と同じ年の優が当主になって実権を握ったらそりゃ反抗するんじゃない？」

「何も分かつてないんだな。荊園が黒法師領に蔓延させた賄賂を断ち切ろうとして優は投獄されかけもしたんだ。荊園はいくら当主だからとはいえ遠慮なしだ。それに、父さんを殺したのは一説には荊園の手の者とも言われてるくらいだぞ。」

「ほんと、欲のかたまりね。」

「僕らが荊園に恨みを持つ理由、分かっただろう。だからお前も少しは協力しろ。」

「それとこれとは別よ。大体いくら地元とはいえなんであんた超上目線なのよ！これでも私は神奈備家の当主よ！」

「じゃあ、お前は僕と対等に渡り合える手柄を今回立てることができなのか？」

「やってみせるわよ！あんたにできることが私にできないわけないじゃない！」

実は、その一部始終を？班のメンバーが見ていた。

「あいつら遅いと思ってたらこんな所で喧嘩してたのか。」

幽羅が呆れながら言った。

「でも、あの二人なかなかいい感じじゃん。」

雷も続けて言った。

「お前らさあ、戦場に来ているって自覚ある？よくこんな場所ですんな話を出来るな。」

剣は二人を止めようとするが、

「「そんな大声出して聖たちに見つかったらどうすんだよ！」」

幽羅と雷がつい大きな声を出してしまった。

「お前ら御饌津から回ってきたのにもう追いついたのか。」

案の定、聖にみつかった。

「御饌津の方はどうだった？」

「なんもいるわけないじゃん。相手油断しすぎじゃない？」

「逆にそれが相手の策略かもしれないだろ。」

「聖は深く考えすぎだつて。」

「なんで僕が幽羅に説教されなきゃいけないんだよ？」

（どうして男ってこんなにバカなの・・・）と、桃子は呆れていた。

第二十七話「別離」

荊園領は比較的山がちな地形であるせいか、卯月を迎えても未だに寒さが残る。？班と？班は合流して荊園の元へと急いだが、この地形のせいで足止めを食らっていた。荊園は峡谷を渡す橋を破壊してしまい、唯一のルートが確保できなくなったのである。

「これは、まずいな。」

剣は途方に暮れたように云った。山落橋さんらくきょうとよばれるこの橋は、名前の通り交通の難所で、もともとまともな橋もなく、沢山の人間がここで命を落としていった。しかし、その橋があっただけまだよかった。橋がなかったら、十里も遠回りしなければならぬことになる。どうするかと迷っていたとき、聖が偵察から帰ってきた。

「案の定、十里先の山道も三十里先の大道も全て敵がいて、ここを通るしか時間的には無理そうだ。」

「強行突破つてのはできないの？」

「突破できても、敵に自分達の存在を気付かれたら終わりだろ。」

「あんたたち、ごちゃごちゃ言つてないでとつとこんな谷くらい飛び越えなさいよ。」

と、突然不意に桃子が口を挟んだ。

「どうやって飛び越えるんだよ？」

「あんたたち何の為に魔術使えんの？」

「空を飛ぶ魔術なんてあるわけないだろ。」

「風巫で強い上昇気流を起こしたら飛んでるみたいになるわよ。」

「じゃあ、お前からやってみるよ。」

「わかったわよ、そのかわりやつたら着いて来なさいよ！」

桃子はそういうと、ひょいと一丈ほどの岩に乗った。

「風巫地疾場。」

因みに、魔術の呪文は読み方は特になくこれらの漢字は意味的なものを含んだ記号にすぎない。実際は、口に出してはいないが魔術

者ならこの記号の大意を理解することが出来る。

桃子はふわりと宙に浮いた。そして慎重に空気中を一步ずつ進んでいく。端から見たら異な光景であった。真夏のアスファルトの上の空気が歪んで見えるように、彼女の足元の強い上昇気流も歪んで見えた。

「一体どんだけ力加えてるんだ？」

「馬鹿力だけは認めてやるよ。」

「見た目は可愛いのにこれじゃあ・・・」

などなど、桃子は罵詈雑言を浴びせられていた。それに気を悪くしたのか、桃子は他の四人を置いて先に行ってしまった。

「どうすんだよ。間違はなく俺達が悪いだろ。」

「ああいう態度をとった桃子にも非があるだろ。」

結局彼らは成す術なく十里先の山道を強行突破したのである。

「大分遅れをとったな。あいつまさか、荊園とつくに倒してもう帰ってるんじゃないか。」

「その可能性は充分だな。あの強さは人間じゃない。」

「聖様でございますか。」

その刹那、聞き覚えのある声が。

「領内に神奈備家の人間が入り込んだので獄に下ろしました。聖様、この手柄はどうなさいますか。」

意地の悪い笑みを浮かべながら、荊園は言った。

「どういっつもりだ？」

「そういっつもりでございます。」

第二十八話「奢州の旅」

他班は領外での活動の為普段とは違う緊張感が迸っているの
だろう。しかし、？班だけは違った。黒法師城の周辺の警護という、
日常的な業務であつたのだ。なぜ、僕が幽羅と焰摩を選んだのか疑
問に思う人もいるだろう。実はこれには深い理由があつた。

遡ること、五年。黒法師城から数十里ほどの観光地である奢州じやうしゅうで
の話である。幽羅と焰摩は旅の商人の子供であり、一族総出でこの
町に来ていた。それと同じく、僕も荊園に連れられこの町に来てい
た。普通、王侯貴族と商人が出会うことは滅多にない。僕はこの当
時から荊園に対する些かの嫌悪感を抱いていた。

荊園は地位や名譽といったものに固執する習癖があるせいか、折
角奢州にきても州侯の邸から一步も外に出る機会がなかった。とい
うか、町に出るのを荊園は止めていた。

「外に出たらだめなの？」

幼い僕は荊園に尋ねた。

「外には、優様の御身分を知っただけで誘拐や脅迫などに巻きこま
れる可能性があるのです。絶対行つてはなりません。」

荊園は頑なにそう言つて僕の外出を拒んだ。僕の子守を任された
者の意見としては荊園の意見は正論である。しかし、幼い僕にその
ようなことは理解できるわけもなく僕はその夜、密かに州侯邸から
脱出した。

夜の庶民の町を歩くのは僕にとって初めての経験だつた。僕は寢
室に行くふりをして州侯邸から脱出したので朝まで荊園には気付か
れないだろう。庶民の町に出たはいいものの、どこにいけばよいの
か皆目見当が付かない。そこで僕がたまたま足を踏み入れたのは商
人の宿だつたのだ。

「O ▲ ? è s」

聞いた事のない外国語を話して、二人の少年が僕の所に歩み寄ってきた。いきなり来られたので僕は戸惑ったが、しばらくして大人の商人がやってきて、

「この地の子供か？」

と、僕に聞いた。

「いえ、僕は黒法師……」

そういいかけようとしたとき、先ほどの荊園の台詞を思い出して、黒法師城下から来ました。」

どうやら、彼らは疑ってないらしい。

その晩は、彼らの宿で夜を明かした。

朝になる前に州侯邸に帰ってしまったが、翌晩、翌々晩と奢州に滞在していた晩、ずっと彼らの所を訪れたのだった。

なぜ幽羅と焰摩がこの仕事に就いたのか、という本題に戻そう。

たったの三晩しか彼らとの接点はない。だが、その間に彼らからこんなことを耳にしていた。

「我々一族は元来魔術師の一族。幽羅と焰摩は取分け魔術の才能に長けている。あの二人は二人とも聡明で自分で新しい魔術を生み出している。」

僕もそれを荊園に見つからないようこっそりしていた。前にも話したかもしれないが、幽羅と焰摩と共に魔術を生み出したのはこのときだったのである。

第二十九話「奢州候統威」

幽羅と焰摩はちようど、奢州に来ていた。

「黒法師城周辺の警護を行う際には、奢州を抑えておかねば為らない。」

黒法師自身が記した軍記帳にもそう記されてある通り、奢州は観光地の反面軍事上の要害なのである。

「幽羅。」

「どうした、焰摩。」

「確かに黒法師城は優も聖も出払っていて警護が希薄だ。でも、俺達二人に任せるのはあまりに軽率過ぎないと思わない？」

「それは俺も思っていた。俺達二人以外にも誰かいるのかな？」

「でも、重臣の太宰さんや飛梅さんもないわけじゃん。」

「そういえば優に、奢州に着いたら州候邸に寄ってくれて頼まれてたよな。」

「奢州の州候に兵力を借りでもするのかな？」

「だけど奢州ってそんな軍備に力入れてないし、民間兵の百人中隊一個ぐらいしかないんじゃない？」

「素人ってことは魔術使えないわけじゃん。素人がいくら百人いても殆ど戦力にはならないだろ。」

「まあ、とりあえず州候邸に行ってみるか。」

奢州候とは、奢州一帯を統治する役職である。軍備に力を入れてこそいないが、観光・文化の中心として栄えている。しかし、地理的要因はあまり安全とはいえず、古代から黒法師城の鬼門封じとして要害とされてきた。東には神奈備山、北には魔界山地、西には御饌津山と三方を山に囲まれていて人が住みにくいせいもあり、半世紀前まではここは軍事基地としてのみ使われていた。現在も一万人ほどの民衆しか住んでいない。

奢州候邸にて奢州候の奢統威しゃとういに謁した幽羅と焰摩は、早速、

「当主優勅令で西方王荊園を討伐せよとの命が下っております。勅令では、奢州候邸を訪ねよとだけ申し下しがございましたが、当主の御意を御存知ですか？」

焰摩は厳格な雰囲気醸し出すような低い声で統威に告げた。しかし、統威は黙っていて答えようとしない。実は、僕は統威に予め幽羅と焰摩が来ることを伝えておいてあり、二人に渡して欲しい文書も預けておいた。その文書の内容は、統威が二人とともに城下の警護を任ずるという中身のものだった。

「御存知ないのですか？」

「・・・・・・」

統威が黙るのも無理はなかった。統威は荊園より二つ年上だったが、荊園の横行により奢州に軍事力を行使して強制的に左遷された経緯もあるため、荊園を恐れていた。でもこれは三十年も前の話であつて、幽羅や焰摩が知る由もない。そのため、統威は荊園との戦争に介入することを避けていた。そしてやっと、

「私も齢五十に達した。君達のような若者には劣るだろう。私は荊園を恐れているただの老い耄れた。後は君達の手で黒法師家を守りなさい。」

それは、統威の最後の言葉だった。幽羅と焰摩が黒法師城下に帰った翌日、統威は僕に、

「我奢州候を辞す。跡継は杜埜公と火龍公が適任と存じ上げる。」
という短い内容の手紙を送った。その後、統威は姿をくらました。

第三十話「荊園死す」

聖は突然の荊園の発言に驚きを隠せなかった。

「どういうことだ？」

「人質をとったのです。」

「なにが目的だ？」

「私はただ黒法師家のことを考えて生きて参りました。その折、魔鉱石の存在を知り得たのです。」

「魔鉱石が欲しいのか？」

「いえ、もう魔鉱石が必要とされる時代は終わりました。私はこの度魔国王に即位するのです。」

「どういう意味だ？当主ですらないあんたが？」

「私は当主ではありません。しかし、私は他の御三家の当主よりも遙かに優れております。もちろん、あなたさまも優遇しますよ。」

「そんな勝手なまねしてどうする？それより、桃子は？」

「あの小賢しい娘はこの近くにいます。ただし、引渡し条件として葉竹亜弥子を連れて来い。」

「なんで亜弥子を？」

「翳鬼様が御希望だ。」

聖は何故翳鬼が亜弥子を欲しがっているのか分からなかった。しかし、荊園と翳鬼が繋がっていることは証明されたのだ。

「亜弥子ならば華爛にいる。」

「ならば、話が早い。華爛には私がもう手を打ってある。華爛軍に捕虜として捕まった暁には直接翳鬼の所へ身柄を送る。翳鬼の所に葉竹亜弥子が着き次第、神奈備桃子は解放する。」

「なんで、亜弥子の身柄が欲しいのだ？」

「彼女は六道家の当主でこそございませんが、葉竹六道以来の名魔術師としての才能を兼ね備えています。」

「翳鬼は亜弥子の戦力が欲しいのか？」

「どうでしょう。」

「いい加減にしろよ!」

聖はその刹那、荊園に掴みかかった。周りでこれまでずっと黙っていた剣と雷と幽羅は必死に止めたが、聖はそれを振り払って荊園の肋骨付近を刀で抉った。

「聖様、本当の敵は私ではない筈…」

荊園は息絶えた。しかし、荊園の死は全ての始まりでしかなかったのだ。

第三十一話「忘れ物」

荊園の訃報は瞬く間に廼刹や翳鬼、華爛王府に届いた。廼刹や翳鬼はあくまで個人の為、この報せを受けた後には暫く身を隠す必要性があった。しかし、華爛は荊園死せりと聞くと軍を大挙して爛魔街道（魔国と華爛を結ぶ街道）伝いに攻上ってきた。聖たち荊園方面の部隊や魔国府や神奈備領の部隊、城下守護の部隊も急いで合流して、爛魔街道の宿場町である籠鳥ろうちやうに陣を構えた。

籠鳥は奢州と似たような都市であるが、有史には華爛が攻めて来るといふ記述が残っていないように、一切要害としては意味を成していない。

「荊園はただの謀叛だが、華爛は本国もちゃんとある。どうすればいいんだ？」

聖が皆に尋ねた。皆は悩んでいたが、僕の脳裏に、ふと、ある作戦が思いついたのだ。

「奢統威がない今、ここにいる全員が戦争の経験が皆無だ。そのため、戦術は華爛に劣るだろう。でも、裏を返せばその分華爛は魔国の戦術を侮っていることになるのだから、戦術なんて考えずにただ猪突猛進していけば逆に不意打ちになるんじゃないの？」

全員が、こんな馬鹿馬鹿しい軍師なんて前代未聞だ、と思っているのが表情から窺える。ただ一名を除いては。

その一名とは、他ならぬ葉竹亜弥子である。

「私は優の言う通りだと思う。だって下手な戦術たてて時間食うよりは、絶対スピーディーに動いたほうがいいじゃない。」

まさか、この案を亜弥子一人だけが賛成してくれるとは思ってもなかった。亜弥子は普段から僕の戦術を始めとする様々な所で文句をつけたりしている。僕は亜弥子の表情を見てみたが、亜弥子は僕の方に向かって笑みを浮かべていた。彼女は妖艶な色気こそないが、可愛げがある。しかし、亜弥子の表情が急に真剣になった。

「ねえ。」

「何？」

一同が亜弥子の方に顔を向けた。

「何か大事な事を忘れてない？」

「うんうん。」

何十人も人間が同じ反応をとるのは滑稽にも見えた。

「で、何が？」

亜弥子はすこし呼吸を落ち着かせながら口を少し動かした。

「▲○○? йπ」

「何、もう一回言つて。」

「桃子ちゃんはどこなの!!!」

亜弥子は大声をあげて叫んだ。

一瞬にして、その場の空気が凍りついた。そういえば、神奈備桃子の姿が見えないのである。

「まだ荊園の城に幽閉されている。僕が急いで探しに行くから、みんなはここで華爛に備えて！」

聖は急いで無人の荊園城に向かった。

第三十二話「姉弟」

目前に華爛の一隊が見えてきた。相変わらず華爛軍の軍備は魔国とは比べ物にならない。大分近くまで来ているので、鬨の一声が今にでも聞こえるかというような一触即発の様子を呈していた。

「とうとう華爛軍が来たな。」

剣が僕の耳元でそう言ったのがはっきり聞き取れた。

「何か策はあるのか？」

剣が僕に問うてくる。ここで、僕が正直に策はない、と言ってしまつと全体の士気に影響してしまうからとても本当のことはいえない。

「守るだけじゃそのうち看破されるな。」

僕は曖昧な返答しかできなかった。しかし、剣はそれを察して、

「俺にいい案がある。」

と、僕の耳元で囁いた。

（お前、天才！！！！）僕は心の中でそう思った。

一方、華爛軍では。

「どうやら魔国では奢統威が奢州候の職を辞したようです。」

鎧に顔を埋めた男が言った。

「それは、私達にとつては朗報ね。」

緊張した陣中の雰囲気とは懸け離れた能天気な声の少女が言った。

「華爛の恐ろしさを知らないで一戦交えようなんて。」

「如何致しましょうか。」

鎧男の横の覆面男が言った。

「簡単なことよ。これまで何故魔国が華爛を攻めてこなかったと思う？それは、華爛は魔国御三家全くと血縁関係を持つほどの深い間柄だからなのよ。私の父は黒衣琳で、つい最近まで魔国に住んでいたのよ。魔国の奴らのやり方なんて百も承知の上でのこの戦いよ。私

達が負ける可能性なんてある？」

奇しくも、華爛軍を統率する大将の名前は、黒衣漚。彼女は黒衣優、聖の実の姉に当たる人物なのである。

「で、敵の大將は誰？まさか荊園とかじゃないでしょうね。」

「荊園は黒衣聖に倒されたそうです。」

「黒法師家での内輪揉め？」

実は、彼女が驚いていたのはそんなことではない。聖が荊園を倒した、つまり聖は相当な強敵として自分の前に立ちただかっている存在だという事実を思いがけない形で知ることになったからだ。

第三十三話「戦局急展開」

聖が機転を利かして、僕ら全員に招集をかけた。数日ほど経った夜、全員が揃った。

「華爛軍があんなに近くまで来ているな。」

夜叉丸さんは少し驚いていた。

「優。お前が陣頭指揮を執れ。」

「僕がですか？」

「いいから。お前が指揮を執れ。」

「何ですか？」

「もしかして、ビビッているのか？」

「いえ、そういう訳では・・・」

「つべこべ言わずにやれよ！」

珍しく夜叉丸さんの語気が強かった。僕は夜叉丸さんの機嫌が悪い理由が全く見当がつかない。

一方、華爛軍。

総大将始め全軍が引き返そうとしていた。

「どういことですか？」

「どうせ、向こうが攻めて来ることはないんでしょ。なら、こっちが帰ったら、向こうも帰る。」

「それでは、華爛公様に・・・」

「私が責任を持って華爛公様には報告する。魔国侵略は聊か時期尚早かと、と。」

華爛の総大将は、部下にちゃんとした説明もせずそう決めた。

「僕からの報告は以上だ。」

剣が言った。

「お疲れ。じゃあ、僕らも帰るか。」

夜叉丸さんだけが、不満そうな顔をしていたが、僕達はこの急展開に驚きながらも、黒法師城に帰ることになった。このような事態になった原因は僕達にもわからなかったのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5492i/>

魔界戦記

2010年10月8日13時36分発行